
名もなき戦線の物語

蒼衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき戦線の物語

【Nコード】

N9231T

【作者名】

蒼衣

【あらすじ】

『人斬り事件』 これを機に、主人公の生活が一変した。世界に絶望しながら生きる少年のある出会いをキッカケに、周囲を取り巻く生活が大きく変わる。今度は生きるために得体の知れない『何か』と生死を賭け、命のバトルが開幕する ！ この話はダイクバトルファンタジーです。

ちなみに序章は陰鬱で少々グロテスク表現があります。苦手な方や明るい話の方が好きな方は、登場人物紹介を読めば一章から読むことができるようにしてしますので、そちらからもよろしく願います。

いただきます。

第一話 一握りの日常

キンコーン

最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。それと同時に先程まで黒板に文字を書いていた先生が「今日はここまでー」と持っていたチョークを置く。クラス委員が号令を掛け、今日の高校生活は終わった。

僕は必要な教科書やノートを自分の鞆に詰め込む作業を開始する。その隣で、ある女の子二人が会話をしているのが聞こえた。たまたま聞こえたという形なので、顔はもちろん机の引き出しの方を見て下を向けたままで、である。

「ねー、また人斬り事件起きたんだってー」

「えー、じゃあもうじき百人いくかもねー」

「怖いねー」

二人とも眉をひそめ、二人して相づちを打ち合う。でも表情からは、恐怖が半分、好奇心半分が見て取れた。自分たちが被害に遭うのは怖い、この事件の行く末はどうなるのだろうか興味がある、といったところか。

ここで『人斬り事件』について補足をしておくと、これは文字通り人が何者かに斬りつけられているという事件である。今月に入って被害者数が約五十人も増えた。さっきの女の子たちが話していた通り、合計斬りつけられた人の数はもうすぐで百にのぼる。今この事件は各メディアに取り上げられ、大きく報じられているので、誰でも情報を入手することができるのだ。

勿論こんな大きな事件に、政府や警察が黙っているはずはない。いろいろな手段がとられてきたが、しかし結果を見て分かれるとおりどれも芳しい成果は出ていない。犯人を捕まえるはおろか、犯人の特定さえもできていないのだ。大きな集団なのか、はたまた個人のしていることなのか、それさえも分かっていない。警察は集団の行動であるとしているが、それもうなのだろう。犯人に犯行の止まる様子はない。今日もまた被害者が出た次第である。

ここで皆疑問が浮上してくる。それは、何故犯人がこんな行動をしているのか、ということだ。個人の恨みなら特定の人だけを狙えばいい。なのに被害者に共通点はなく、接点もない。それもこの『人切り事件』の大きな謎の一つだった。不特定多数に斬りかかるのは何故か。精神異常者ではないかと一部で囁かれているが、僕はそうは思っていない。何か犯人には意図がある。なんとなく、そう思うのだ。理由も何もなく、ただ直感で思っただけなのだが、僕の直感自分が恐ろしくなるほどに当たる。今回は当たらないことを願いたいものだ。

ひとしきり自分の帰宅準備を終え、僕は一人席を立った。そして誰にもさようならも言わずに、無言で教室を後にする。この空間から切り離された僕は、清々する気分だった。歩き、靴箱にたどり着く。靴を取り出し、足を入れてひもを締めた。足を動かし、また歩くのを再開する。この学校の校庭にサッカー部の部員らしき人物が、部活準備をするのが横目で見えた。黙って僕は通り過ぎ、校門を出て、いつもの帰宅路を突き進む。

僕は帰宅部だった。どこにも部活に入っていないので、放課後になるとすぐに家に帰ることが出来た。

冷淡な人間なんだ、僕は自負する。特に何かにやる気を出すこと

もない。部活動もしなければ、勉強ができる訳でもない。お前は冷めてんなあ、昔の友だちに言われたことがある。確かに、と否定はしなかった。僕はめんどくさがりだ。何にも興味を示さない。

もちろん、

生きることにも。

僕は生きたくない、むしろ死にたいと思う人種である。人と話るのがめんどうだ、勉強するのもめんどうだ、親に叱られるがそれでも僕は変わらない。人との関わりを望まない僕に、友だちができるはずなどない訳で、高校二年生になった今でも高校に友だちは中学の時の友だちしかない。クラスなんて、一人も話すひとなんていない。クラスの人とも馴染めず、勉強が嫌いな僕が高校生活を満喫できる訳など無い。もう、生きるのが嫌になった。死にたいな、独り考える時間が増えた。

でもそう考えるだけで、僕はそれを実行したことなど一度もない。結局のところは恐いのだ、死ぬのが。自分で命を絶つのは。僕は死ぬ勇氣を持ち合わせていない。生きたくないのに、今までダラダラと生きてきたのはその為であった。

はー、今日もいつもの代わり映えのない一日が終わったなあ…。

腕を後ろで組み、考える。

誰か僕を殺してくれないかなー、と虫のいいことを思う。

例えばさ、今ここで後ろから誰か僕のことを刺してくれたり…、この際『人斬り事件』でも構わないからさ。考え、一人苦笑を洩らす。なんて、そんな展開なんてあるわけないか。

と、僕が少しそれを望み、わざと人通りの少ない小道に足向け、路地に入った時だ。

「

.....」

後ろから気配を感じた。

何か漠然とした人の動きを感じた。

それは嘘ではないか、と気配を感じながらも小道をさつきと変わらぬペースで数歩歩く。そしてやはり、気配は僕についてきていた。

間違いない。つけられてる。

僕は冷や汗をかく思いだった。しかしそれとは反対に僕は先ほどと同じで冷ややかな表情を浮かべながら、歩を進める。ひゅー、と口笛を吹きたい気分だった。

まさか本当に出やがったとはなあ。口元に笑みが小さく浮かぶ。こんなにグットタイミングだと、もうむしろ怖いよな。そして同時にもしかしたらこれは『人切り事件』の犯人なのではないかと考える。そして僕が百人目の被害者になるかもな、なんと栄光なことで。僕はまだ後ろから気配があることを確認しつつ、さらに人はいない小道へと足を進める。さあ、もうこれで邪魔なものは何一つないはずだ。僕は誰もいない道の真ん中で、ゆっくり振り返る。そして相手がどう出るかを見た。

するとそこに、黒い人影が何にも臆することなく、堂々としたように道の前に躍り出た。顔はフードを被っているのではなくは見えな
いが、にやりと口に笑みが浮かんでいる。もしかしたら僕が自分の
存在に気づいたことに驚くかと思ったのだが、黒影は薄気味悪くた
だ笑っていた。

僕はそいつと一瞬、目を合わせる。

これが、合図となった。

僕にとっては自分の命を賭けた、そいつにとっては命を取れるか
どうかを賭けた、少しの戦いの幕開けだった。

そいつは咆哮を上げ、後ろから元から用意していたと思わせるナ
イフを取り出し、僕に向かって突進してくる。フードの中から一瞬
だけ、不気味に光る赤い瞳が晒された。僕はそれをすんでのところ
でかわし、横に飛ぶようにして跳ねる。わずか0.5秒後、僕がい
たところにナイフが獲物を斬り殺そうと宙を切った。あぶねー、あ
と少し遅かったら死んでたぞ、と避けながら冷や汗を出す。

この後、どうやって動いたら、と考えようとしたそんな矢先、な
んとそいつがあっという間に体勢を立て直し、僕に向けてナイフを
振り下ろしたのだ。速いつ、速すぎる！ 目を見開き硬直する僕の
目の前で、そいつの顔には微笑が浮かんでいた。そして、

グサッ

辺りに血飛沫が飛び散る。ナイフは見事胸に刺さり、僕の体から
血が噴き出した。僕は感覚を失い前のめりに倒れ込む。ああ、死ん
じやうのかな…。これでもう、僕は消えちやうのかな…。すべての
感覚が無くなる前に、そいつの淡々とした、

「……まえ……を……最後に……」

という声が耳に残った。

そして、

僕の意識は闇へと落ちていった。

第二話 別世界に迷いこむと

はっ

気づき、僕が目を覚ましたのは先ほど刺された道の上だった。そこに僕は大きな字になるようにして、仰向けに倒れていた。視界に白く靄がかかり、周りがぼやけて見える。ううーん、目を擦りながら上半身を起こす。再び目を開き、視界がクリアになった途端、

「……！！」

さっきまであった出来事を思い出した。何もかも、鮮明に。自分の胸から血が溢れ出すところまできちんと。そうだ、刺された傷は……！？ さつと胸に手をあてる。

なっ……！！？

そして事実気づいた時、僕は驚愕に目を見開いた。

ない…、刺された傷が、ない……！！

どうして！？ 驚かずにはいらなかった。確かにあの黒い影に刺されたのに…！ 血が流れるところも見ていたのに…、どうして…！ あの感覚は嘘じゃない。確かに感じたんだ。刺された衝撃も、血が噴き出す感覚も、確かに…！ あれは死んだはずだ。生きてるはずがない。じゃあ何で僕はいるんだ、生きているんだ！？

僕は恐ろしくなり、慌てて立ち上がる。辺りを顔を動かし、見渡した。

やっぱりさっきのところだ…。黒影と遭遇したところと同じだ…。電柱の位置も、家の並びも、全部…。でも決定的に何かが違った。

何が違うのだろう、頭のつかかりを模索する。そして辺りを三回ほど見渡して、やっと気づいた。…人影がないんだ。人のいる気配がない。僕しかない。ここには、生きている面影がなかった。

辺りに暗く光がおちる。僕の足下から伸びる影は、自分の身長を超えていた。静寂だけが不気味に周りを包み込み、一種の閉鎖空間にでも閉じ込められたかのような圧迫感に襲われる。恐怖に己の心を支配され、手足をろくに動かすことができない。そんな中、頭だけが作動していた。

ここは存在しているようで存在していない、いわばあつてはならない空間のよう。さっきまで僕がいたところとまったく同じ場所なはずなのに、まるで別世界にでも来たような錯覚が生じる。ここは、どこだ…？ こんなところ、僕は知らない……！

頭がおかしくなりそうだった。意味が分からない。なんだ、ここは僕の頭の中のことなのか？ または、もう死んだ後の世界なのか？ 呆然とその場に立ち尽くす。

「……………」

数分突っ立ったことにより今ある情報を頭の中で整理できた僕は、軽く頭を掻き、目的地もなく歩き出すことにした。この場にいつまでも突っ立っただけでも仕方がない。とにかく今は、情報を集めるべきだ。そう考え、ひとまずは行動を起こすことにした。

なんとなく、ここからは自分の家が近いので寄ってみることにした。めんどくさいので靴は履いたまま中に入り、薄暗い部屋に電気をつける。

…うん、これは見間違ふことなんてなく自分の家だ。リビングだつて、個室だつて寸分変わらない。テレビもあった。気になり、机の上に半ば放置されるようにして置いてあるリモコンを手に取り、電源ボタンを押す。

……。何も反応なし、か。さすがにここでテレビがついて今の状況が分かるかも、なんていう甘い考えはなかったか。リモコンは置き、一応家中を探し回ってみる。でも、いくら探しても僕の家族の姿はありそうになかった。いないよなあ…。やっぱ、いないよなあ…。短いため息を洩らす。これからどうするかな…。頭をわさわさと掻く。

その時。ぐうう、とタイミングがいいのか悪いのか僕のお腹が鳴った。そうか、今はそんな時間なのか。視線を台所にある冷蔵庫に移す。……。まずは腹ごしらえをしよう。

冷蔵庫には幸運なことに、惣菜が残っていた。取り出し、味などは気にせずいただきますもせず箸を進める。一気に詰め込むようにして食い物を胃に収めた。こんなに腹減ってたのか、と我ながら驚いたものだ。自分は小食だと思っていたけど、と考えてみてそういえば刺されてからどれくらいの時間が経ったのかも分からないんだからどうしようもないな、と考えるのを放棄する。一応自宅だし、と使い終わった食器はきちんと台所の方に持っていった。洗いはしないけどね。

そしてそのまま回れ右をしようとしたとき、キッチンとまるで自分の存在を自己主張するかのように、台所にあった包丁が光った。まじまじとそれを眺める。思考するように顔に添えていた自分の手を、何の気なしに包丁に伸ばした。

何が起きるか分からないこの世界だし護身用に、ということ。

次に僕は、歩いて近くの商店街へとやってきた。

元から想像はついてはいたのだが、やはり人っ子一人おらず、商店街はガラ空きだった。風がぴゅーと吹き、落ち葉を拾い上げる。なんか…寂しいなあ。まるで廃れてるみたいだ。僕はとりあえず握りの希望を持って、人はいないかとあたりの搜索を開始する。こんなに広いんだ、誰か一人くらいはいるはずだ、きっと。我ながら情けないな、と落胆に浸りつつ片っ端から店内を見てまわる。

おもちゃ屋、八百屋、魚屋　その他の店も確認してまわる。

でもそれでも、人の気配を感じることはできなかった。一体この世界はどうなってるんだ。さすがにここまでだと、飽き飽きしてくる。僕に一体どうしろというんだ。はっ、まさかこれは夢か、夢オチか。もしそうなら夢よ、頼むから覚めてくれ。懇願も虚しい。…そうだ、ここは一旦ポジティブになろう。もっと別のところを探せば人はいるはずだ。例えば人が多いようなところ、ショッピングモールとか学校とか。そうだな、それがいい。まずは…、そうだな、ここから近い学校から行こうかな。決めたらすぐに行動に移す。体を回転させ、後ろを向いて

「手を上げなさい」

まさに振り返ったその時その場所で、声が降り注いだ。しかしそれは天からのお声ではなく、今聞きたいと思った母親の声でもなく、冷淡な声だった。僕は顔を動かして、声の主を見る。

そこには、女の子が居た。多分僕と同じ年くらい。どこかは知らないが制服を身につけ、腰まである濃い赤色の髪を艶やかになびかせ、気の強そうなややつり目の瞳を射貫くように僕に向けている。ううん…、美人だなあ…、もしその子が両手で僕に向かっていている構えている拳銃さえなかったら仲良くしたかったな。一人自己解析をし、改めてその子を見る。その子は顔をひよいひよいと動かして見せた。どうやらそれは僕に手に持っている包丁を下に置き、と命じているらしい。やれやれ、僕はとことんついてないな、了解の意を示すためにしゃがみ持っていた包丁は地面に置いた。

「分かった、分かった。降参だよ」

体を立たせ、上に上げた手をひらひら動かす。その子は見定め、ように僕をじっと見た。

「諦めるのが早いね」

「まあね。こんなところで無駄に戦いたくないし、というより包丁は銃には勝てないだろうからね」

一人肩をすくめる。その子は拳銃を持った手は下ろさないまま、少しずつ僕の方に歩いてきた。

「そうとも限らないわよ。包丁も勝つことあると思うわ」

「そうかもね。でも僕はこんなかわいい子と戦いたくないんだ」

僕の言葉にその子はきょとした。本気で驚いている様だった。

た。動きを一時的に止める。そして口を開き、なんと笑い出したのだ。可笑しそうに。ひとしきり笑った後、その子は僕に視線を向けて言った。

「あゝよく言うわ。あなた、ズボンにも包丁隠してるじゃない」
「えーと、これは……」

バレてましたか。僕は本当に降参の意味を込めて手を上げる。やれやれ、もしその子が近づいて何かするようならこの包丁で応戦しようと思っただけで、隠し装備していたというのに。そこまで分かるなんて、この子ただ者じゃないな。ふう、とため息をつく。この子に捕まったのが運の尽きか。

「煮るなり焼くなりお好きにどうぞ」

あきらかな諦めの言葉を吐く。もういいんだ、僕。よく分からないけど、もういいんだ。この後どうされてしまうんだろう。やはりあの拳銃で撃ち殺されてしまうのだろうか。それとも拷問かなにか……？ バイバイ、僕の短かった十六年間。特に楽しくなかったけど、さようなら。一人で別れの挨拶を述べていたとき、ぷつ、とその子が噴き出した。へ？ と驚いて顔をそちらに向ける。するとその子は本当におかしそうに腹を抱えて笑っていた。

「あなた、おもしろいわ！ もう尊敬に値するレベルよ！」
「そりゃどうも……」

褒められているか正直微妙なところなので、僕も微妙な反応で返す。

「しかも包丁をそこに忍ばせるなんてやるわね。あなた、やり手か

もしれない」

「はあ……」

反応が取りづらく、生返事をする。さっきまでの気迫ある姿はどこへやら。どう対応すればいいか分からず、口を閉じる僕を見ながら、その子は笑いをやめ、僕に言った。

「あたしは藍梨^{あいり}って言うの」

いきなりどうして自己紹介？　とは思ったが口には出さなかった。そして、愛梨という少女は拳銃を可憐にポケットの中に仕舞い、ずっと近寄って僕を嬉々とした顔で見ながらこう言い放った。

「あなた、一緒に戦わない？」

第三話 虚無の世界

結局僕は、藍梨という少女の申し出を断った。別にその子が嫌いだったわけじゃない。むしろ個人としては好感が持てる人物ではある。かわいい女の子と一緒にいられると聞いて、喜ばない男なんていないだろう。

しかし、僕はついていかなかった。その理由は、要領が得なかったのだ。それは一体どうということかというと、これがさっきの僕と少女の会話である

「あなた、一緒に戦わない？」

「はあ…？」

笑顔で喋る少女の言葉が理解できずに、思わず聞き返してしまう。不覚にも、惚けてしまった。何言ってるんだ、この子。戦う？一緒に？頭に多数の疑問符が並ぶ。僕は少し眉間にシワをよせて、尋ねた。

「戦う？」

「そう、戦うの」

大きく首を縦に動かす少女。いちいち動作が大げさだなあ…。

「でもさ、何と？」

僕の言葉を聞いた少女は驚いたように目を見開いた。

「あなた、まさか知らないの…？」

まるで誰でも知っているのが当然だ、というような口ぶり。訝しげながらも、首肯はする。そんな僕の態度を見て、突然少女がああ、と納得したような顔になった。

「なるほどね」

「何が？」

「あなたはそれだったか」

「だから何だよ」

一人勝手に納得する少女に、僕は少し苛立ちの表情を浮かべる。この子、ちょーと腹立つな…。少女はえっへん、と何故か偉そうに腕を腰にあてて、喋り出した。

「あなた、この世界に来たばかりなのね。だから知らなくても当然だわ」

「？」

少女の言葉に首を傾げる。来たばかり…？どういうことだ…？僕の疑問に構わず、少女は言葉が続ける。

「じゃああなた、運がよかったのね。何にも遭遇することがなくて、もしも遭ってたら、確実にあなた死んでたわ」

「！」

死、という言葉に過剰に反応してしまう。この言葉は、僕の一種のトラウマになった。つい数時間前の、ナイフで刺された時のことを思い出してしまう。無言になり、ここであれ、と違和感を覚える。死ぬだって……何を言ってるんだ。僕には死を心配する必要なんてないはずなのに。何故なら僕はもう死んでいるはずなのだから。これ以上死にようがないはずなんだから。僕は少女の話に慌ててストゥップをかける。

「ちょっと待ってくれ」

「？ 何よ」

調子良く話しているところを止められた所為なのか、若干不機嫌気味に少女は応える。でも僕は今、そのことに構っている余裕などなかった。

「今、死んでた、とかなんとか言ってたよな」

「そうね」

「僕は死ぬはずはないんだ。だって刺されて、死んだはずだから」
「はあ？」

僕の言葉を聞いた途端、少女は明らかに眉を動かした。

「あんた、何言ってるのよ」

「お前こそ、何言ってるんだよ」

両者の意見が食い違う。少女はさも当然のように、次の言葉を吐いた。

「あなたが死んでるはずないじゃない」

今度は、僕が動きを止める番だった。

「え？何だった？」

「だから、あなた死んでないのよ。まだ生きてるわ。だって死んでるんなら、今動いているはずないじゃない。それとも何？あなた、まさか自分は幽霊だ、とかぬかすんじゃないんでしょうね」

「いや、それはしないけど……」

少女の言い分を聞き、確かに、と僕は唸る。何も僕は自分が幽霊だとかいう非科学的なことがあるとは思ってはいない。しかし確かに死んでいるなら今、僕が動いていることと矛盾点が生じる。夢か、または死んだ後の世界とか？…でもそれもなさそうだけどもなあ…。苦々しく笑みを浮かべる。少女の言ったことを真に受けるなら、僕は生きているのか？ いや、でもそれはないはず。だって、

「僕が生きているはずはないよ。だってナイフで刺されたんだ。しかもこう胸にグサアという感じに。自分でもなんとなく感覚で分かるんだけど、結構大量出血してて、辺りが血の水たまりみたいになったんだ。意識も遠くに遠のいていったし。あれは死んでるはずだよ」

自分が死んでいることを必死に熱弁する僕って一体、と深く考えるのはこの際止めておくことにする。少女はそんな僕を見て、さらに怪訝な顔をした。

「あ、あなたねえ…」

手を頭に置き、はぁあと盛大にため息をつく。

「勘違いしてるわよ、あんた」

そして少女はいかにも呆れたような表情をして、言った。

「あなた、そもそも死んでないのよ。勝手にあなたが死んだと勘違いしてるだけよ」

「え……………」

惚ける僕に、さらに言葉が続ける。

「確かに血はたくさん流れたかもしれない。それに意識が途切れたかもしれない。でもね、生きてるの。意識はない、ただの肉体としての体は正常に機能したまま、ね」

言葉を失う僕を見て、でもまあしょうがないわよね、と少女が洩らす。

「戸惑っているのは何も、あなただけじゃないわ。あたしも初めて来たときはそうだった。そんな非現実的なことが、起こりうるはずはないってね」

「でも、じゃあ何で今は信じてるんだ…？」

何か確実な根拠でもあるっていうのか？

そんなものが、この世界に？

僕の問いに、少女は顔に冷笑を浮かべる。僕にはそれは、あるいは自虐的な笑みにも見えた。

「…そんなの、信じるか信じないかは己次第よ。自分で決めたらいいわ。でもね…」

言葉を句切り、少女は目を細めどこか虚空を見つめる。

「あんなの見たら、信じるしかないじゃない。あんな、あんな化物を目の前で見て、襲われそうになって。他にもね、あたし見たのよ。人がその化物に喰われて、目の前で死ぬところを。そんなのを見たら、疑う気持ちも吹っ飛ぶってものよ」

少女は辛そうで、悲痛な笑みを浮かべる。腕は組んでいるが、恐怖からか少しばかり足が小刻みに震えているようだった。

目の前で、死を目撃する。

それはどれほどのことで、この少女にどれだけの衝撃を与えたかは想像に難くない。

しかし僕は、化物というものを漠然としか想像できなかった。こればかりは、遭ったことがないのでどうしようもない。人の命を喰らう存在　想像するだけで身震いした。だからね、と少女は組んでいた腕をほどき、真剣な顔をする。

「あたしと一緒に戦わない？一人だけじゃ、危ないわ。人が多い方が、危険も減るはずよ」

僕は少女の顔は見ずに、今残っている自分の選択肢について、考える。今回は冗談や嘘は抜きで、きちんと真面目に受け止めてのことだった。

やや下を向けていた顔を、上に上げる。そして、今しがたした決断を口に出した。

「少し、考えさせてくれないか？」

「……分かったわ」

かすかに顔を動かし、頷く少女。

「あなたなら、なんとなくだけどそう応えそうな気がしてたから」
「……………」

「じゃあ、あたしはそろそろ行くわ。仲間が待ってるの。これでもね、仲間がいるのよ?」

右の髪に編み込むように付けている黒いリボンと髪のを束をふわっと宙に浮かせ、僕に背を向ける。

「結論はいつでもいいから。またね」

「…ああ、また」

歩き去っていく少女の背中が小さく見えたような気がした。去りゆく揺れる後ろ髪を見て、少女の姿が見えなくなってから僕も正反對の方へと歩き出す。

また、あの子と会えるかな そう考えながら。

僕は考える時間が欲しかった。

少女の話した内容が本当のことなのかもそうだが、自分の存在意義についても、もっとよく理解しておきたかったというのが大きな

理由であつたと思う。

これからどうするかな……、ぼんやり考え、後ろで腕を組む。適当にこの辺をぶらぶらしようと思つて、歩いているとだんだん見慣れない景色になつてきた。さつきまでは家が建ち並ぶ住宅地だったのに、今は小道の田んぼが並ぶ田畑が広がっている。そこいらに雑草が生え、石も落ちていて殺伐としていた。

一体どれほどの時間歩いたのだろうか。

もう太陽は地平線に頭のとっぺんしか見えていない。あと少しで夜になるな……。ここまで来て、わざわざ家に引き返すのも癪だし、どこかいい寝床でも見つけよう。

そんな適当なプランを立て、しばらく歩いたところ。

目の前に廃墟が見えた。外装からするに、昔は工場だったらしい。立っている店の看板は端の方は剥がれ落ち、字も薄くなつていても読めない。どうやらかなり放置されている場所のようだ。

よし、ここにしよう。晩を明かすにはちょうどよさそうだ。僕は一人よし、と頷き足を玄関へと進める。玄関の近くまで来た時、ここでまさかの事態が起きた。

「よお」

「！」

なんと、人がいたのだ。ちょい髭を生やし、短めの髪もボサボサ気味でジャージが何かを着ている三十代くらいに見える中年の男の人。玄関の前の階段に腰掛け、気だるそうに空を仰いでいる。藍梨という少女と合わせて遭遇するのは二人目になる。人は少ないが、いない訳ではないらしい。その人は僕の姿をみとめ、僕に顔を向け

た。

「お茶でもどうだい？」

そう言つてその人は缶コーヒーを片手に、快活に笑つた。

第四話 始まりの楽園

僕は勇気がなかったのかもしれないし、はたまた臆病だったのかもしれない。それゆえ、僕はその男の提案を受け、席を同席することとなった。席とは言っても大層なものではなく、廃墟の工場入り口の階段なのだが、それでも招かれた人である僕がどうこう言えるたちではない。ゆえに僕は言われた通り、その男の階段の隣に腰掛けた。

「座り心地はどうだい？」

と笑いながら言うその男に僕は、

「地面よりはいいです」

と肩をすくめて応える。

僕の答えがおもしろかったのか、その男はそうかいそうかい、とあははと笑った。この態度からするに、この男はなかなかガラの良い奴であるらしい。僕の適当な応えに笑って受け流せる年上だから、心が広いのかもしれない。

僕はうつすら夜空が見える空を仰ぐ。星はまだ見えないが、上には白い月が隠れるように身を置いていた。一息つき、思う。この男は初対面だしはたして信用できる人なのだろうか。一緒に居て、大丈夫だろうか。なんとなく僕の勘はここにいても大丈夫だ、と告げていた。だからそれを信用し、しばらくはここに居ようと決める。

僕との問答を終えた男は、ちょっと待ってろ、と立ち上がり席を

外した。僕は一人、物思いに耽る。数分の後、男は何か手に持って帰ってきた。

「ほらよ」

そしてその男の手から僕へ向けて、何かが放たれる。僕はかろうじてそれを受け止めた。次に、何を受け取ったのかを確認する。

『ウーロン茶』

ラベルに書いてあった。先ほど持ってきたのだろうか、ペットボトルはひんやりと冷たい。手を通し、体も冷やしていくようだった。僕の中で少し火照りが冷める。

「……ありがとうございます」

戸惑い、取りあえずは感謝の意を述べた僕を見て何を勘違いしたのか、

「あー、大丈夫だ。毒とかは入ってねえから」

とにつ、と笑いながら言っ、僕の隣に座る。

「まあ今日初対面の奴にそう言われたって信用できねえだろうけどな」

「……そんなことないです」

「そーかい、そーかい。信用してもらえて何よりさ」

「いえ、」

明らかに僕の言葉を信じてはおらず、適当な返答をする男に、僕は勘違いを解くため口を開く。

「毒が入っていても大丈夫です。僕、それでも飲みますから」
「ほー……」

僕の言葉に驚いたのかその男は少し目を丸くする。だが次には目を細め、どこを見ているのか分からないが上を向いた。

「……命は粗末にしちゃあ、いけねえな」

とそれだけ言葉を口にした。何を考えているのかまるで検討がつかない顔で男は空を見上げたまま動かない。後には僕を苛む沈黙が辺りを包んだ。それに耐えきれなくなつて僕は持っていたペットボトルのフタを空ける。

キュポツ あのパットボトル特有の音が辺りに響いた。

僕は自棄になり、ペットボトルの口を自分の口に向け、ゴクゴク音を立てて飲んだ。

ふと気がつくと、男は空から顔を戻していた。それは僕が結局飲みきれずにペットボトル半分まで残つたお茶を手に持ち、僕も空を見上げて少し経つてからだつた。男は自分の飲み終わった缶コーヒを突然右手で後ろに振りかぶり、前に放り投げた。多少の時間があき、それはカランと下に落ちる。人がいない廃墟に音が反響した。男は改めてと僕の方を向く。

「俺は藤本って言うんだ」

何を思ったのか、突然名を名乗った。そうですか、と特に感情を

込めることなく僕は答える。

「人と過ごすのは久しぶりのことだ。おまえさんはどうだ？」

「僕はついさつき商店街で女の子に会いましたよ。長い髪の似合う可愛い女の子でした。確か名前は……藍梨って言ったかな」

少女の顔を思い出しつつ口を動かす。

「へえ、そうかい」

自分から質問しておきながら、僕の言葉は特には聞いていないようだった。思うことがあるのか、腕を組み、難しい顔をしている。

「……兄ちゃんよあ」

僕のことを見ずに男は言った。

「この世界に来て、不幸だったなあ」

「……………」

「ここは命の保証はないんだ。死んだらそれで終わりだ。そんな場所なんだ。下手したら、元の世界に戻れないかもしれない」

「……。でもそれは藤本さんもですよね？」

僕に言われてはっ、と気がついたかのように、まあそうだな、と苦笑いを洩らす。僕は少し眉をひそめたが、結局何も言わなかった。藤本の言葉の続きを待つ。

太陽は完全に地平線に沈み、星があまたに空に出現し、自己主張をするかのように瞬き始めた。大きく光るものもあれば、小さくても一生懸命空を彩ろうとする星もある。雲のない空でそれは、美しい幻想的な光景だった。

「…それにしてもおかしいよな。ここが『楽園』なんて。一体どこが『楽園』なんだっての」

藤本は結局言おうとしていた言葉は口を嚙み、口に出すことはしなかった。変わりに僕との会話に別の話題を提示する。まるで、誰でも知っている当たり前の話で場を繋ごうとするかのように。しかしそれは僕にとって当たり前でもなんでもなくて、ただ衝撃を受けた。

『楽園』だって……？

初めて聞いた言葉に、猛烈な違和感を覚えた。

この世界が、『楽園』……？それは一体……？

僕は藤本の顔を窺ってから、尋ねる。

「『楽園』ってどういうことですか？『楽園』って、何ですか？」

「は？『楽園』は『楽園』だろうよ。何だ、もしかしてお前、知らないのか？」

「はい」

僕の言葉に心底驚いたかのように、藤本は手を上に上げ、大仰に驚いてみせた。

「おいおい」と藤本は言う。

呆れた顔で僕を見た。

「おいおいおいおい、勘弁してくれや、兄ちゃん。悪い冗談はよそうぜ」

何回おいおいと藤本が口にしたのかと思ったがそれは数えなくても三回であったと気づき、考えるのを止める。しかしこの驚きよう、

僕が『楽園』について知らないのは、よっぽどのことであるようだ。僕は、本当に知らないんです、と答えた。僕の少しの冗談も含まれていない顔を見て、マジなのかよ、と藤本は目を剥く。しょうがないほどにそれは事実なので、僕はだた頷いた。藤本はそれに、そうなのか、と渋々といった様子で納得をし、やがてボリボリと頭を無造作に掻く。

「『楽園』ってのはなあ」

自分自身も納得しきれていない。そんな表情で藤本は口を開いた。

「このことだ。この世界は『楽園』と呼ばれてるんだ」

誰かに見られているような気がした。でもそれは気のせいだったのかもしれない。ふと空を見上げると、幾多の星がまるで僕たちを嘲笑うかのような不敵に笑い、見下すように瞬いた。

第四話 始まりの楽園（後書き）

読んで下さいまして、ありがとうございます。

このついでに感想や評価をいただけると、嬉しいです。

飛び上がるほどです

もちろん誤字脱字、厳しいお言葉もOKです。

（一）
むしろよろしく願います>

第五話 樂園と絶園

藤本はまずこう言った。

「俺はなあ、今から一ヶ月前くらいかな。帰宅途中の時にこう、腹を黒ずくめの奴に刺されてね」

藤本は自分のお腹の前で手を動かし、ナイフが刺さる素振りをする。

「あの時はもう、死んだと思ったね。だって凄い出血量だったんだ。他人事のように自分の流れる血を見て、人間ってこんなに血が出るもんなんだなー、って考えたくらいだよ。そしてそれからどれくらいの時間がかかったのかは知らないが、俺は目を覚ました。そう、刺された場所と同じところだよ。立ち上がって、そして自分の状況を知ったとき、俺は自分の目を疑い、しまいには自分の頭を疑ったね。だっておかしいじゃないか。生きてるなんて。死んだと思ってたんだ。まったくどうしたもんかと、立ち尽くしたさ」

藤本の話の聞き、僕も相づちを打つ。

「そうですね。僕も同じでした。まったく同じ状態でしたよ」

「やつはそうだよなあ……。みんなたぶん俺らと同じようなものさ。意味が分からない。混乱する」

藤本は首を動かし、腕を組み直す。

「そこは同じなら…、兄ちゃんが知らないのは放送のことだろうな」

放送……？

疑問には思ったが、何もコメントはしなかった。藤本の次の言葉を待つ。藤本はどこを見ているのか前の何も無い田んぼが広がる土地を見ながら、口を開いた。

「たしか俺がこの世界に来た一時間後くらいのことかな。その頃には俺は一応、冷静になっていた。この世界を掴むために歩き回ったのさ。でもこの世界は昔いたところと何かは違うが、ほとんど構造は同じだろう？ だから俺は焦りを感じながら、訳も分からずこの世界を歩いていて。だが途中で悟ったんだな。ここにはここを示す欠片が存在しないってね。どこに行けばいいのかも分からないんだ。まるで広大な砂漠に一人、放り投げられたような思いだったよ。俺は結局挫折したんだ。歩き回って足が痛くなってきたところだったし、休憩するには手ごろな公園がある、と思ってそこのベンチに一人大きく腰掛けてた。路頭に迷いながら、な。そんな時、放送が流れたんだ」

ふう、と藤本は短く息を吐く。

「最初はザザとノイズが入った。その数秒後、ある『声』が話し始めた。確かな、こんな感じだったよ。『みなさん、こんにちば。ようこそ、楽園へ。おそらくここへ来て、戸惑ってる方が多数おられることでしょう。順を追って、説明いたしましょう。』」

その『声』とやらを再現しているのか、妙な喋り方で藤本は話す。

「『あなたたちは、何者かに刺されたはずですよ。それもどこから見

ても致命傷に。しかし、実はそれは死んでいないのです。だって現にあなたちは生きているでしょう？ ええ、勿論幽霊や死んだ後の世界だという訳ではございません。確実に、生きてます。

じゃあどうということなんだ。そう思われるでしょう。それはそうですよね、気になるはずですよ。ではカラクリを教えて差し上げましょう。【ナイフ】です。あなたたちを刺したナイフにこそ、仕掛けがあったのです。じゃあどうということか？ …、そう慌てることはないじゃないですか。こちらはきちんと説明するつもりなのです。この余興を楽しまずして、どうするのですか。

あのナイフは特注品です。どこにも売ってない、ただ一つ存在しているナイフです。では次に、あなたたちが一番気になるであろうナイフの特性について語りましょうか。普通、人はナイフなどという物に刺されたらどうなるでしょうか？ 致命傷、あるいは死なのもかもしれませんね。少なくとも、無事ではいられない。そういう人を傷つける類の物です。ではあの特注品であるナイフで刺されるとどうなるのでしょうか？ 『』

ここで長々話していた藤本が言葉を切った。僕は藤本に多少の疑問を抱かないわけにはいかなかった。放送を、そんな一回くらい聞いただけで、こうも正確に覚えていられるものなのか？ 話し方も口調もここまでなりすましたように言うことはできるのか？ 藤本はこの放送を、飽き飽きするくらいに何度も聞いたのか。

あるいは、放送自体に特殊な施しがあったのか。

僕は後者な気がした。こんな世界を作ることができるような奴だ。それくらいしたって、別におかしいことはないだろう。

藤本は息を短く吸い、また話し出す。

『人は死にません。もしこのナイフで刺されたら、言うならば、

【植物状態】になるのです。

つまり、生きてはいます。でも、自分の意志で体を動かすことなどできません。それは何故か？ 体というのは脳があり、命令する器官があるから動くのです。じゃあ肝心の意志 魂がなかったら動くことなどできませんよね？ …… そうです。魂だけを抜かしていただきました。今のあなたたちは、その魂の方なのです。魂だけを、この世界に連れてきたのです。』

僕は、絶句した。

藤本の話聞き、どうしようもないくらいに、頭が真っ白になった。

植物状態……？

精神だけをここに持ってきた……？

……………。

そんな…、そんな非現実的なこと…

それこそ頭がおかしくなりそうだ。どうすればいいんだ？ この話を、一体どうやって信じればいいんだ？ どう受け止めればいいというんだ？ …… とりあえず笑っておこう。あーっはっは。……、いや、ないなこれは。一人でカラ笑いほど悲しいものはないな、うん。一人芝居みたいな事をしている間、なおも藤本の話は続く。

「『この世界での構造はこうです。あつちの世界ではあなたたちの体が生きている。こつちではあなたたちの精神が生きている。もしも。もしも体の方が死んだら精神はどうなりますか？ おそらく消滅するでしょう。消えて無くなってしまふことでしょう。では、こつちの世界で精神が死んだらどうなるでしょうね？ どうなってしまうんでしょうね？

… もうお分かりではないでしょう？ そう、ここで精神が死んだら同じく【死】にます。ここで死んだら、本当の世界にも死が訪れ

るのです。つまり、ここで死んだらたとえあちらの世界とは関係なかったとしても、死んでしまうという事です。ね？ おもしろいでしょう。この世界は奥が深いんですよ。この世界を創造するのは、とてつもない手間が掛かったんだから、それほどの物ができていてもおかしくはないですけどね。…ちなみに言っておくと、この世界には【化物】がいます。まあその説明は…、いつか実物に遭うだろうと思うので、よしとしましょう。では警告という大それたほどの事ではありませんが、忠告です。』

「『死にたくないなら、この世界で精々生き延びて下さい』」

「……！！」

藤本の言葉は、ここで途切れた。僕はこの忠告に動悸を覚え、喉を強く持ち、息をしばらくすることができなかった。目を見開く。…話を聞いた後に、この世界を見ると別世界のように、歪んで見えた。道が気持ち悪いくらいに、曲がりくねり、異次元の動きをしていた。吐き気がしたが、すんでのところだとどめる。

藤本は先程までの別人のような話し方ではなく、もうさっきまでの口調に戻っていた。「たしか、こんな感じだったかな。すまん、俺、記憶力良くないんだ」と苦笑いを浮かべるのは間違いなく本人のそれだ。人格の豹変具合が、恐ろしく感じ、手が少し震えたような気がした。……あーあ、一体どうしろって言っただ。生き残れ？ 何から？ 例の化物とやらからか？ 僕はもう、思考することを放り投げた。もう考えるだけ、無駄なように感じたからだ。

僕の微かな異変を感じたのか、藤本は「まあ、無理すんな。この世界に来てそんなの信じれるわけないんだ。徐々に慣れるしかないさ」とこの話を打ち切った。そして立ち上がって、

「夕食は食ったのか？」

少し分かるか分からないかぐらいに頷いた僕に、

「そうか、じゃあそろそろ寝るか」と言った。

もしかしたら、僕の顔色が悪いのを気遣ってくれたのかもしれない。藤本は、他人を気づきやすく、気遣えるそんな大人のようにであった。僕がしばらく座ったまま、空を見上げてぼんやりしている間に、藤本はなにやら糸もほつれ、くしゃくしゃになった俗に言うボロい感じのタオルケットを持ってきた。それをさっきのウーロン茶と同じように僕に放り投げる。さすがにペットボトルのようにズバツとはなく、ふんわりとはあったが。投げてから、藤本はまた歩いてきて僕の近くのうつすらはえた芝生に堂々と寝そべった。両腕を頭の後ろで組み、僕に話しかける。

「兄ちゃん。それで寝な」

「はあ……。ありがとうございます」

曖昧な感謝の気持ちを伝える。…というかこれで寝ろというのか。もし今が夏ではなく冬だったら凍死しているところだ。でもないよりはマシなので、受け取った物を持って僕も藤本の近くの芝生に体を移動する。そこで僕は、藤本にはタオルケットはおろか、何も無いことに気がついた。

「…あの、何もなしで寝るんですか？」

「あー、まあな。今は夏だし、俺は丈夫だし大丈夫だろう」

にかつ、と笑う藤本になんとなく申し訳なく思っで、すいません、と言った。

「？ 何で謝ってんだ？」

「いや、貴重なタオルケットを分けていただいて申し訳ないなと思
いまして」

「んー、いや、それは言う必要はないぞ。だってバカは風邪を引か
ないって言うじゃないか」

この場合はちよいと、違うくない？

しかも自分でバカって言うっちゃってるし。

「それにそのタオルケット、ボロくなったから、ちようど捨てよう
と思っでたところだったから、気にすんな」

おい。

いくらなんでもそれは酷くないかい？

気にすんなって、別の意味で気にするわ。

…、とそんなツツコミが一応分け与えてもらった身からできるは
ずもなく、苦笑いで対応した。

僕は大の字になっで、芝生に寝転がった。必然的に頭は上を向く
ので、空も眺めた。涙が出そうなほど、綺麗な夜空だった。一応建
前的にタオルケットは体にかぶせて寝る。しかし、しばらく寝付く
ことはできなかった。放送の話しが頭で何度もリピートされ、うず
うずとして眠れない。

ビウウと風が吹き、髪をふわつと浮かせる。夏の風は涼しくて気

持ちが良かった。しかもここは田んぼにつつまれた田舎なので、風がきれいでさらに気持ちよくなった。僕はその風に合わせて目は取りあえずは閉じる。黒い世界に入り込んだように、頭の中で広大な世界が広がった。しばらく気持ちよさに身をゆだねる。

そして今にも眠れるかもしれない、そんなところまで来た時。

「なあ、お前さん起きてるか？」

藤本がボソと言葉を吐いた。藤本もやはり寝る体勢は作ったものの、眠れてはいなかったようだ。僕は若干めんどくさげにはい…、と返答する。

「そうか…」

藤本はまたここで口を閉ざした。

…？ 僕が起きてるかどうか確認したかっただけか？ 僕はまた寝る体勢を作り、目を閉じる。その時にまた、藤本が何気ない口調で、何も考えていないのか、あるいは考えがあつてのことなのか話し出した。

「なんでここの『楽園』と言われてるんだろーな」

それは一種の独り言のようだった。

「どうして『楽園』と揶揄されてるんだろうな。俺には分からない。

何もこればつちもさっぱり分からない。でも一つ思ったのはな。確実に思えるのはな。『ここは樂園』はないよなあ。この世界の一体どこに『樂園』の要素があるっていうんだよ。どこにもねえんだ。欠片さえないんだ。むしろ逆なんじゃねえか？　ここはむしろ『絶園』なんじゃないのか？」

藤本は乾いた笑いを洩らした。
たしかに、と僕は思った。

そしてそこからの記憶はない。僕はよほどこの世界に来て疲れていたのか、深い眠りに入っていた。こんなにもぐっすりと寝たのは、実に久しぶりのことだった。

第六話 生きること死ぬこと

「ん……」

あれからどれくらい時間が経ったのだろうか。

僕が目覚めたときは、すでに太陽が地平線から頭を出していた。朝日をまぶしいぐらい顔に浴び、思わず目を細くし顔をしかめる。手で顔の前に影を作った。僕は隣を見る。そこには藤本の姿はなかった。布団自体がないのでこの場合正しくないと思うが、文字通りもぬけの殻であった。

「……」

僕は無造作に頭を掻く。ふわあと大きく口を開け、あくびをした。さて、そろそろ起きますか。

今までここにいたのは夜だったから気づかなかったが、見渡すと自然豊かでのどかな土地だった。田んぼが広がっており、細くて小さな小川が道の端を流れている。木が生い茂っているところには、新緑の葉が風に音を立て、気持ちよさそうに揺られていた。

すうと息を吸う。空気が美味しかった。

よっと、僕は起き上がり軽く手を上に上げて体をひねる。手を大きく上げて、伸ばしばんさいの格好をした。

「よし」

一人気合いを入れ、手を下ろしもう一度辺りを確認する。

藤本さんは、どこに行ったのだろう…？

そして先刻から姿の見えない人を探す。

どこか行ってしまったのかな…？ この後どうしような…？

うーんと首を少し捻った。その時。

「おーい、兄ちゃん起きたのか。おはよう」

歯をにっとさせ、笑顔で廃墟である工場の向こう側から、手を振りながら藤本が登場した。左手でこちらにぶんぶん手を振っているが、右手には何か物を抱えているらしい。僕は藤本が近くまで来てから、おはようございます、と挨拶をした。

「おうよ、おはよーさん」

藤本は言いながら近くにあったこれまた古く、ギリギリ使えるラインの背丈の低い机の上に持ってきたものをドサと置く。じー、とそれらを見ると、それはなにかのパンのようだった。メロンパンやらチョコレートパンだかホットドックやらが散らばっている。菓子パンか…？ 中にはところどころ牛乳やフルーツジュースなども紛れ込んでいた。僕は疑問に思い、藤本の顔を窺う。得意げな顔が、そこにはあつた。

「これが今日の俺たちの朝食だ！ 心して食べよ！」

「……え、いやこれ藤本さんが作ったんじゃないんですよね？」

「ああ、そうだな！」

「じゃあ何故そこで得意顔…。それにこれ、明らかにどこかスーパーかコンビニの物でしょう。買ってきたんですか？」

「いや？ かつさらってきた！」

「……………は？」

藤本の言葉に僕は目を点にする。

「かつさらってきた？　つまりお金は……？」

「当然払ってない！」

「ですよー……」

どうしよう、藤本さんがおかしくなったぞ。もしや昨日布団も掛けずに寝た、あれが原因か？

僕があまりに呆れて言葉も出せずにいると、藤本は言葉を挟んだ。

「なにか誤解しているようだから言っておくがな、これは盗みじゃないぞ」

「いや、これは明らかな盗みでしょう……」

「だから違うんだって」

「どう違うんですか」

僕の質問に、うーんと、と藤本が答える。

「だからな、店員さんおらず、職員おらず、食べ物だけが並んでいるんだからよ」

藤本が一つ息をつく。

「つまりよ、要するにお金払ったって一体誰に払うんだよ」

「！」

あ。

忘れていた。

つまるところ、この世界に人は少数しか存在していないのだ。店員さんがいないコンビニにどうやってお金を支払うのか。ただ置いてある物を貰ってきた、藤本の行為はまさにそれなのだ。じゃあこれは盗みにはならないのか。

取りあえずその部分は納得という物をしておく。でも、今度は次に疑問が出来た。あ、おい、と藤本が止める声も聞かないで、僕は一つの菓子パンを手にする。そしてパッケージの後ろを見た。賞味期限　　あれ、大丈夫だ……。

……？

「…藤本さん、これ賞味期限切れてないですよね？」

「ん？そりゃそうだろ。切れてるものは食えんだろ」

その通りだ。

でも今僕が論点としてしているのは、そこではない。

「でもですね、藤本さんがこの世界に来て一ヶ月が経ちますよね？」

「？　そうだな」

「じゃあおかしくありませんか？どうして賞味期限が切れていないのか」

「…？」

僕の言葉を訝しがりながら、藤本は分からないと首を横に振る。

「だからですね。簡潔に言ってしまうと、賞味期限が切れてないとおかしくありませんか？」

「…何でだよ？」

「この食料品はずっとこの世界に置いてあるはずなんです。それを

藤本さんは持つてきている。それって、この食料品は一ヶ月もの間、ずっと置かれていたということになりませんか？」

「！ あ、そうか」

ここで初めて藤本が理解したように、少し目を見張る。

「確かに、それはおかしいな」

「ですよ。食べ物にはいつか期限がやってくる。それは当たり前であり、必然なんです。でもこの世界にはない。それについて言うてしまうと藤本さん、この食料品はいつもどこから取って来てるんでしょうか？」

「うーん…、いつも同じコンビニから ってあ」

僕が言いたいことに気づき、藤本はさらに目を見張る。

「そうなんです。この食料品は、減ってもいないんですよ。本来あるはずの物の有限性という当たり前であるはずのものが、この世界には、ない」

「……そんなの、兄ちゃんに言われるまで考えもしなかったな。ただあるから貰おう、としか考えなかった」

まいったな、と藤本は自分の頭をボリボリと掻いた。

「じゃあこの世界って、本当になんなんだろうなあ……」

ボソと呟いた藤本の意見は僕と共通の意見、そのままだった。

この世界は、何もかもがおかしい。

世界の構造自体がおかしい。

でも、ここで何も知らずに僕たちは、生きていくほかすべはない。現状を受け入れていくしかないのだ。

しばらくの沈黙の後、

「…食べましょうか」

と言う僕の言葉で朝食を開始した。

空は快晴。

ほとんど空に雲の姿は見えない。

太陽が真上に上がり、光が辺りに平等にまき散らされる。

その下、僕は廃墟の階段で体育座りをしていた。何もかんがえることはせず、ただぼんやりと外の風景を眺める。風が辺りを舞い、葉が宙に浮く。髪の毛を通り過ぎてゆく風からは、夏の香りを感じた。

もう昼になったのか……。

僕は、もうそろそろ自分の行く道について、答えを出さねばならない。この世界で、一体どうやって生活していくことにするのか、結論を出さねばいけない。ズルズルと先延ばしには、できない。

どうしたものかとため息をつく。

本当に、どうしようなあ……。

僕が一人で悩んでいた時、隣でドサと音がした。横に顔を向けると、

「よお」

と藤本が階段に腰掛けていた。さっきどこかに行ったとは思った

が、どうやら用事もすんだらしく、またここに戻ってきたらしい。僕は顔をまた前に向けるだけで、口は開かなかった。代わりに藤本が口を開く。

「兄ちゃんは今からどうするんだい？」

……今僕が考えていた事を…。

藤本は他人に気づきやすいのか、または僕自身が分かりやすいだけなのか。僕は軽く首を横に振る。

「そうか」

感慨深そうに藤本は言葉を返した。

ちよつと意外だった。藤本なら、まあ適当にでも考えな、とか笑いながら言つてきそうなイメージだったから、真面目な口ぶりで驚いた。

今度は真剣な表情をして、僕に尋ねる。

「そついやお前さ。昔毒が入っていても飲むつて言つたよな？」

「そう言えば昔、そんなことを言つた気がする。」

「……はい」

「それつて、お前は死にたいつてことなのか」

「……はい」

ゆつくりと僕は首肯する。

そんな僕を見て、藤本は無言になり、ボソリと言葉を吐いた。

「……やめとけよ」

「え？」

「死にたいなんて言うなよ。そんなのは、よくない」

「……」

僕は唇を軽く噛み、下を向く。

…何も言い返すことなんてできない。
…何も言うことなど、できない。

藤本はそんな僕を見て、ふっと顔を綻ばせ、真剣な雰囲気解いた。

「ごめんな、悪く言うつもりじゃなかったんだ。ただ、そういうのは俺はちよつと許せなくてな」

え、と藤本を見る。

それは一体…？

藤本は次に、強い口調でこう言った。

「俺は生きたいんだ。ある人と、約束したんだ」

その言葉からは強い意志が感じられた。
生きたい、そう言った藤本はまた僕を見て、ははと笑った。

第七話

？

パンツ

激しい銃声が鳴り響く。

しかもそれは一発二発の話ではない。数十発もの火花が散る。

「ちっ……」

でもそれでも、この戦いはまだ終わりそうにはなかった。

ここは、ある商店街の雨を凌ぐために設置されているアーケードの中。普通なら人々の笑い声で賑わう商店街は、朝日の光しか入らず、店に電気はついておらず、暖簾も上がってなければ、看板も出していない。それに商品である食べ物や服が砕けたり破けたりと散らばり、殺伐とした雰囲気がただ漂っている。

そんな商店街で中型くらいの拳銃を片手に持ち、ある少女が憎々しげに舌打ちをした。

腰まである艶やかな濃い赤色の髪をなびかせ、どこの学校の物だらうかネクタイをきつちりつけた制服を着用している。鼻もスラッとしていて、肌も透き通るように白く、なかなか美人な顔立ちをしている。にも関わらず今はその顔を眉を動かし、汗をうつすら滲ませ、苛ついた表情を浮かべていた。

「どうなってんのよ、倒しても倒しても終わらないんだけど」

台詞の最中にも少女は即座に発砲し、一体の化物を蹴散らす。しかし表情には嬉々とする様子など欠片もなく、ただ苦悶があった。

この商店街には化物がいる。

それも数体といった数の話どころではない。

下手したら五十はゆうにありそうである。

化物はどこか一点

すなわち獲物を目指していた。それが

この少女らであると言っわけだ。少女達が真ん中にいて、化物と果敢に戦い、応戦を繰り返している。

「はっ、お前はもう弱音を吐くのか。化物が寄ってくるなら

」

ズダダダダンッ

「倒せばいいだけの話だ」

そこには少女以外に、一人青年にしてはまだ早いだろう、男が立っていた。

年齢では少年と呼ぶにふさわしい。だが精悍な顔立ちに、キリとした眉、朝日に照らされる漆黒の髪、女の子がみたら黄色い声をあげそうな顔と容姿を持っている。大人びている外見からは思い当たらないだろうが、それでも男は世間では高校生と部類される者であった。

少年は少女に語る言葉の途中で自分が持っているマシンガンを、化物に向かって数十発も一気に連射した。最後、煙が上がリ、バタバタと倒れてゆく化物を見て少年はふんと鼻を鳴らす。

「……………」

少女はこの少年の台詞を聞き、眉をひくつかせた。

「へ、へえ〜？ 理人^{りひと}、あんた言ってくれるじゃない」

理人と呼ばれた少年はそれでも余裕の笑みを少女に返す。

「当然のことを言っただけだ。藍梨、何か言いたいことでもあるのか？」

はっ、と言葉の最後に付きそうな少年の物言い。

ブチッ 少女はこの挑戦的な言葉に、切れた。無言であまりの怒りから体がかカタカタと震えている。顔を上げたその目には、闘志がみなぎっていた。突如、少女は持っていた自分の拳銃を後ろに放り投げる。次に、両腕をスカートに移動させ、さっきよりも大きめの銃を二丁、取り出した。安全装置を外し、戦闘態勢に構える。

化物を見る顔には、不敵な笑みがあつた。

「確かに、倒せばいいだけの話、よねっ！！」

スカートを翻し、少女は自ら化物の中に突っ込んでいく。しかしそれは自殺行為ではない。それは少女が入っていったところから次々に化物が倒れていく様を見ていれば分かるはずだ。どんどんと道が出来てゆく。

それを見ていて、少年はやっと本気を出したのか、と笑った。少年もマシンガンの弾を補給し直し、またグリップをしっかりと握る。狙いはここにいる化物すべての討伐。そのために、注意を払いながらもしっかりと倒す

少年は化物をスコープの中から見つめ、口の端をに、と持ち上げた。

化物が、いた。

商店街で少年少女の喧騒の音が、後ろから聞こえてくる。

化物は、商店街ではなく、何らかの意志を持って別の場所へと移動していた。

化物　高さは二メートルはゆうに超えている。茶色なのか肌色なのか黒色なのか、区別することができない色の体をしている。大きな足を一步、一步と動かしてのし動く。大男、そう形容してもいいのかもしれない。腕を横にだらんと垂らし、足で動く様はまさにそのようにも見える。しかし顔は無く、人間では想像も付かないような大きな口を開くところからは、やはり人間ではなく化物と言った方がいいだろうと見受けられる。体はボサボサの毛むくじやらずで、もう素肌など見ることもままならない。

のし　のし

化物は足を動かす。

歩幅は大きく、着々と移動距離は増してゆく。

もう商店街は小さく後ろに見えるばかりである。次には家も店もなく都市などとは無関係そうな広大な田んぼの広がる土地にやってきた。草木生い茂り、自然を感じさせるこの場に、あまりにも似合わない姿の化物がいる。風が吹き、草木は逆らえず風に揺られたが、化物はそんなものお構いなしにずんずん進む。

そつと化物は顔と呼ばれる部位を前に上げる。

そこからは、瞳を思わせる二つの光 不気味なくらいに真っ赤な閃光が、一瞬晒された。

第八話 生きたい気持ち

「俺にはなあ、友だちがいたんだ」

藤本はまずこの言葉から話し始めた。

太陽は真上。

すなわち今は、お昼時。

僕と藤本は緑の短い芝生にゆったりと座っている。気持ちいいくらいにその風が吹き、芝生の草たちをゆらゆらと揺らす。廃墟の取れかけのぼろぼろの看板も、風に揺られ、微かに音を立てる。

藤本は足を組み、片腕を地べたにつき、顔を上に上げて空を仰いでいた。

「あつちの世界で、じゃなくて、こつちのこの『楽園』に、友だちがいたんだ」

「……」

藤本は照れくさそうに、鼻を掻く。

「俺は一ヶ月ほど前にこの世界に来たって言っただろう？ その時にな、偶然同じような時期に、それも同じような場所である男に会ったんだ。おそらく黒ずくめのやつは、一気に俺とはまた別の奴を襲ったんだろうな。まさにそいつがそうだったって訳だ。そいつはくじ運が悪かったってことだな」

その人のことを思い出しているのだろうか、藤本が懐かしげに目を細めた。

「そいつはな、俺よりちよいと歳が若いやつだった。きちんと聞いたことはないが、たぶん二十代後半、くらいなんじゃないかと思うね。そいつは、責任感が溢れていて、人一倍やる気もあって、リーダーの様な雰囲気で、人から好かれるような性格をしていた。いいことはいいと言い、悪いことも堂々と悪いと言う。しっかりした奴だった。でも、不思議と嫌いにはなれない、そんな男だったんだ」

なんとなく、僕の頭にその人の風貌がぼんやりと浮かんだ。藤本はまだ言葉を続ける。

「俺とそいつは協力関係を結び 仲間になった。この世界で二人で化物と戦いながら、生き残ろうって話し合ってた。お互い何かしら身を守る武器を持って、化物に合うたびに協力して、戦ってた。」

俺は拳銃の扱いが下手だったんだ。引き金を引く、それなら分かるんだが、俺は標的に確実に弾を当てることができなかった。だから俺はナイフで敵と戦う担当で、あいつは拳銃やマシンガンを扱う遠距離担当だった。ま、一種の役割分担だな。でもそれは上手くいったんだ。俺たちはその戦法があっていたらしくてな、化物をうまくこと退けて、生きてたんだ」

比較的体格が大きく、しかし俊敏に身を動かすことができそうな藤本は、確かに近戦の方が向いているのかもしれない。

僕は何気なく視線を下に落とす。

あれ……？

そこで違和感を持つ。

今の話からだ、無くてはいけないだろう、刀を藤本は所持していなかった。

僕は訝しんだが、話に熱中する藤本は気づかない。さっきまで上

に上げていた顔を、下に動かし、僕の方を向いた。

「……………」

しかしさっきまでの表情とはうって変わり、今の藤本は憂いを帯びた、悲しげな顔をしていた。

「でもそいつはな、死んじまっただ」

そう言った藤本の顔は酷く悲痛そうに歪められていた。

僕はあまりのことに息を呑む。

話す藤本の姿があまりにも痛々しく瞳に映った。

「それはある晴れた日のことだった。朝食を食べた俺たちは、いつもの如く化物たちと戦ってたんだ」

「

その日も今日みたいに雲なんてものは空にはなく、一面晴れ渡っていた。

ここはほとんどが廃墟で埋め尽くされていて、まさしく戦場のようであった。家や物のがらくたがごろごろ下に落ちて、敷き詰められている。そんなところに、俺は仲間と共に立って、周りを化物に囲まれながら、戦っていた。

『おい、藤本！ そっちは大丈夫か！？』

『まあな！ 苦戦はしているが、ねっ！ お前こそどうなんだ！？』
『おれの方はなんとか保ってる！』

銃声や爆音などの騒音に包まれているここでは、大声を出さなければ相手に声が届かない。俺はもちろん、そいつも会話する時は叫んだ。

それで、今回の戦も実は上手くいった。

もう敵を残すところあと一体にしていた。

だからこそ俺は、気を緩めていたのかもしれない。

いや…、それはあいつも同じだったのだろう。

『よしっ、あと少しで終わる』

そう言いながら俺は汗をかいている顔に笑みを浮かべ、後ろにいる仲間の方を振り返った。

いつものように、相方の方を向いたんだ。

そいつはいつも俺がそう言って振り向くと、癖なのか白い歯をにっこらせて、まるで少年のように笑うのさ。俺はそれを見ると心が落ち着いてね。だから今回もそれを見たいと思って、振り向いたんだ。

しかし現実には、そうはいかなかった。

『　　っおい！！！！』

目を見開き、思わず叫び声を上げた。

俺の仲間は、

表情を失い崩れ落ちるようにして倒れようとしていた。

何が起こったのか、理解できない。

それでもそいつの背後に、最後の化物が立っていて、それでそいつから血飛沫が上がるところを見たら、いやようにも分かってしま
う。

やられたんだ　　、化物にやられてしまっていたんだ。

驚愕で目を大きくしていた俺はそのことを理解し、次には怒りの表情をあらわにする。もうその時の俺は、理性なんて保てるはずはなかった。気がつくと俺は、刀を片手に化物に怒濤の突進していた。

『　　っおおおおおおおおお！！！！』

無我夢中で刀を振り下ろす。

ブシャアッ

運がよかったのか、斬りかかったところがよかったのか、化物は

何か分からない緑色の液体をぶちまけながら、倒れた。そいつはそれっきり、動かなくなつた。

横目でそれを確認した瞬間、仲間の元に俺は急いで駆け寄る。到着して、体を少し助け起こす。

『藤…も、と……………』

そいつはもう、既に虫の息だつた。

顔は酷く蒼白く、こちらにむける手は震えている。そいつの周りには血だまりが広がっていた。いくら医学に詳しくない俺でも、この出血量では危ない事など、容易に理解できた。みるみるそいつの顔からは血の気が引いていく。でも俺は何もしてやることができない。ただそばにいて、励ましの言葉をかけることしかできない自分がとてつもなく歯がゆく、悔しかった。

そいつはおそらく、自分の命が残りわずかだということに気がついている。

それなのに、

分かっているはずなのに、そいつは俺に笑顔に向けた。

『おれは、もう駄目だ……………』

『駄目なんかじゃねえよ…！ 気を強く持てよ……………！！』

堪えきれず、俺は目から涙を零す。

そいつの差し出された腕を強く握る。

ここで泣いては駄目だ。分かっているのに、どうしてもなく涙が溢れ出してくる。声が震える。

そんな俺を見ながら、そいつは穏やかな笑みで、だがしかし強い意志を持って、顔を微かに横に振った。

『うつん…、もう無理なんだ……』
『っ………』

自分のことなんだから、自分で分かる。

そう目から伝わってきた。俺はもう言葉もなく、詰まらせる。

『最後にさ、藤本に……言いたい、事ある、んだ……』
『………』

どうしてだよ。

何でそんなに優しげな瞳で笑えるんだよ。

どうして……！

『おれはもう、無理……だけど、藤本……には、帰って、欲しいんだ……。生きて、欲しいんだ……。おれの、分も………』

『そんなこと言っな！一緒に帰るんだよ！二人で生きて帰るんだ……！』

そう訴えかけるのに、そいつはゆっくり横に首を振る。

『っ………』

友を失ってしまうことが悲しくて、何も出来ずに泣き言ばかり並べることしかできない自分が悔しくて。どうすればいいのか分からない。どうしなければいけないのか、分からない。

『俺だけじゃ無理だ……、お前がいなきゃ……』

俺は一人、弱音を吐いていた。

顔を向ける事が恥ずかしくて下を向いたまま、口を開いていた。
そうなんだ。

今まで生きてこれたのは、二人で戦ったからなんだ。
俺だけの力じゃない。

だから、俺だけ取り残されたら、もう……、もう……………。

『大丈夫、だよ…。藤本なら、大丈夫、だから……………』

『え……………』

俺は驚き、顔を上げる。

そいつはもう、息をすることさえ苦しい様子で、苦悶の表情だったがそれでも、やはり笑顔で。最後まで他人のことを想って。

『お前は……………、生きて……………』

コテン

ここで力尽きたように、まるでロボットの電池でも切れたかのように、そいつは力を失った。腕がだらんと下に下がり。呼吸音も聞こえなくなり。目ももう焦点など合ってはいなくて。

『あ、ああああ……………』

そしてそいつは、

俺の目の前で、死んだ。

言葉を残して、命尽きた。

俺はもう、どうしようもなくて。

『うわあああああああああああ！！！！』

俺の絶叫は、木霊した。

「そんなことが、あつたんだ」

「……………」

僕はもう、藤本の話に言葉が出てこなかった。
絶句を、していた。

人が死ぬなんて、そんなこと考えることなどできない。ましてや
それが、自分の親しい人であつたなら、なおさら。

僕はどうしても考えてしまう。藤本さんの友だちのその人は、一
体どういう気持ちだったのだろうか。死ぬ間際に、何を考え、思考
していたのだろうか。死にたくない、だったのだろうか。生きたい、
だったのだろうか。もっと生きて、いたかったのだろうか。

藤本は話し終えて、弱々しく笑みを浮かべる。

「そいつにはきつとあっちの世界にも仲間がいたんだぜ。もしかし

たら家族がいたのかもしれない。なのによお、最後まで俺の心配なんて……。……まったく、あいつには敵わねえよ……」

「多分、藤本さんのことが大切だったんですよ」

「……」

突然の僕の言葉に、藤本は動きを止めた。

僕は目で見ても、藤本のことを思考する。

今まで思い悩んでいたのだろう。生きている間、その人に懺悔の気持ちでいっぱいだったのだろう。でも、その人はそんな気持ちで藤本さんに生活して欲しくないはずだ。いつものように、生きていて欲しいと思っているはずだ。だからここで口を出すのはよくないかもしれないと考えたが、藤本さんには伝えたくて、僕はたまらず口を開く。

それを藤本は呆気として、聞いていた。

「やっぱり、藤本さんのことが大切だったんですよ。だから最後まで心配をしていたんです。きっと、そうです」

「………そうかい」

僕の言葉を聞き、藤本の返す声は震え、顔からは一粒の涙が零れた。

僕は何も言わず、ただゆっくりと首肯をする。

藤本は口を噤み、溢れ出す涙を服で必死に拭う。

今までの気持ちごとくと溢れだしたのかのように、声を上げずになっていた。

しばらくはそのまま、藤本が鼻を吸るのと同時に顔を上げる。そしておもむろにゆったりと立ち上がった。顔を動かし、こちらを振り向く。目は泣いたせいで充血していた。それでも、そこには笑顔があった。

「ありがとな。俺、生きるわ。一人でも、喻え化物が何匹も迫ってきたとしても、生きてみせる」

笑う藤本の顔を光が照らし出し、涙は水蒸気が光を反射させてきらきらとまばゆく輝いていた。光がぼうつと包み込み、一層藤本の姿を浮かび上がらせる。

藤本は強い人だった。

何にも負けない強さを持っていた。

「……………」

そんな藤本に。

そんな姿に僕はどうしても、声をかけたくなった。

何か言わなければと、そんな気持ちになった。

だから僕も立ち上がる。

いきなり立ち上がった僕に何事かと藤本は驚いたように目を丸くさせた。

僕は真剣な瞳を藤本に向けて、そして。

「……………」

第九話 「 藤本 」

風が急に吹くのを止めた。

先程まで僕や藤本の髪の毛の揺れも、ぴたつとなくなる。

風はまるで、今の藤本の心情を表しているかのようなのであった。

はじめ藤本は、意味が分からないというように、ぽかんとした表情をしていた。しかし数秒が経つと、しだいに目が見開かれてゆく。

「お前……」

僕の意図が飲み込めないようだった。

確かに、昨日会ったばかりの僕との間柄だ。

そう思うのは、なんら不思議なことではない。

……でも、今は伝えたい。

藤本さんに、伝えたいんだ。

僕はさらに一歩踏み出し、もう一度同じ言葉を口にした。

「僕も、一緒に戦います」

藤本の体がビクツと小さく震える。よく見ると、足も小刻みに震えている。

今まで仲間が死んでから、一人で生きてきた藤本。

そして今、一人でも生きてやるんだと宣言をして、そう心に決めたはずだ。

その中での、僕の言葉。

藤本の心は、確実に揺らいだ。

一人で生きるのは、辛い。

一人で生きようとするのは、哀しい。

見て見ぬふりと決め込んでいた、自分の、あるいは他人との気持ち、思い。

それと、藤本はどう戦っていくのだろうか。

僕は待った。

藤本が自ら答えを模索し、結論を下すまで、待つ。

数秒経った。

数十秒経った。

もうじき、一分が経過するのではないかと思った、そのとき。

藤本は動いた。

自分の答えを示す為に

自分の未来の為に

「……助かるよ」

そう言っ、藤本は顔を綻ばせた。

涙が乾ききつていない顔に笑顔を浮かべて。

それでも心底嬉しそうに。

藤本の表情は、嘘偽りなどはない、本当の笑みであることは、いくら昨日出会った仲である僕にでも分かることだった。その姿は、本心そのままであった。

なんだかそんな藤本さんを見ているとそれが僕にもうつったよう

で、僕も知らない間に笑っていた。口を開き、和やかに。この世界に来て、初めての穏やかな時間、ときだった。
今思うと、こういうのを不幸の中にある『幸せ』と言っのだろう。
これから藤本さんと戦っていくんだ。
二人だけだつて、戦い抜き、生きてゆくんだ。

そう、思つてた。
信じて、疑わなかった

僕は始め、何が起きたのか分からなかった。
思考は頭の外へと追いやられ、理解不可能だった。
どういうこと、なんだ。
これは、一体　　？

僕の目の前で藤本は笑顔で嬉しそうに笑っている。

笑っている。笑っている。笑っている。笑っている。
笑っている。笑っている。笑っている。笑っている。
笑っている。笑っている。笑っている。笑っている。

あれ、
嗤わらつてる……？

7

ツ
!
┐

気づいた時は、言葉にならなかった。
言葉など、出てくるはずもなかった。

.....
 21222

!!!.....

藤本は笑って立っている。

その真後ろに、

【化物がいた】

大きな毛むくじやらかな体をこちらに向け、奇麗なくらいに真っ赤な閃光を二つこちらに覗かせて、口を裂けるほどに大きく開き、そのまま藤本に襲いかかり

僕は恐怖のあまり、言葉を放つことができなかった。体が竦み、動かない。体の全身から汗が噴き出す。目を開き、それでも目で化物の姿を捕らえて離すことができない。体が鉛のように、重たくのしかかり、硬直する。

どうしよう、藤本に化物のことを知らせないといけないのに……

…！！

どうして僕の体はいうことを聞いてくれないんだ……！！

どうして、

どうして……！！

僕の様子が何かおかしい。

尋常ではない。

僕のこの様子を見た藤本はそれに、気がついた。

さらに僕の目線より、何か自分の後ろにいるようだ、ということにも気づく。

藤本はゆっくり、自分の後ろを振り向いた。

そして真後ろにあるモノを理解して、

「え……………？」

惚けたように、声を上げた。

そう、

それだけだった。

たった、それだけのことだった。

ガバツと藤本の姿が消えた。

化物は、藤本を丸呑みにした。

藤本の部分、何も残さずに。

思わせる欠片、何一つ残さずに。

藤本は、

【喰】われた。

残されたのは呆然と立ち尽くすことしかできない僕と、
化物の咀嚼音だった。

グチャグチャグチャ　藤本が喰われ、骨と肉が無理矢理剥が
され、血肉が渦巻き、それらが咀嚼され、噛み千切られる音。

ゴキゴキなのかボキボキなのか　藤本の肉と剥がされ残った
骨が、完膚無きほどに折られ、原形を留めることなどできないほど
に粉々になる音。

そんな、聞いている方があまりのことに狂ってしまいそうな音を
聞き、嘔吐感に襲われる。食べたものが胃から逆流し、戻ってくる
のを感じる。

気持ちが悪……。

でもそれどころじゃ……、藤本、藤本さんが……。

足に力が入らなくなり、思わず後ろに無様に転んでしまう。座り
込んでしまう。僕はただ、顔を蒼白させ、手も足もわなわなと震
わせて、恐怖することしかできなくて。

恐ろしかった。

今、目の前で何が起きているのか、考えるだけで恐怖に見舞わ
れて。

「ああ……ああああああ………」

これが、僕のこの世界で初めて見た本物の【死】だった。

僕の目の前で藤本は、

死んだ。

第十話 全員しゅーっ

空には陰りなど一切無い黄色の太陽が昇っている。光をサンサンと平等に降らせるその姿は一種の神々しさを感ぜさせた。

その一方で、グチャグチャと嫌な音を立てて、化物はまだ咀嚼をしている。

その口元は真っ赤な赤色の血がつき、したたり落ちていた。辺りは生臭い臭いが立ち籠めている。下の地面には小さく赤い血だまりができていた。

「あああああ……………」

そのたった十数メートル後ろに僕はへたり込み、無様すぎるほどに腰を抜かしている。口からは声にもならないような奇声が洩れるばかりである。

藤本さんが……

死んだ…、のか…？

あの藤本さんが……………？

混乱が脳を覆い尽くし、頭痛を催す。ついで吐き気までするようになった。恐くて恐くて目を背けたいはずなのに、背けられない。目を見開き硬直したまま微動だにもできない。手は震える。足も震える。ついでに頭がクラクラしてくる。この次に自分がしなきゃいけない行動は分かっていた。

逃げなきゃ…、ここから逃げなきゃ……………。

でなきゃ殺される、【喰】われる。

分かってる、頭では充分すぎるほどに理解できている。それでも恐怖に怯えた体は言うことを聞こうとしない。主の危機が来たってお構いなしに動こうとしない。

もう一度前に視線を戻すと、

「っ!!」

化物の食事、もとい惨殺は終わっていた。モグモグと口を動かしながら、赤い狂ったくらいに透き通る瞳でこちらを見ている。吟味するように、じっと見ている。そして。口を動かすこともしなくなった化物はこちらに顔を向けたまま、のそつと立ち上がった。またこれから、狩りをするのだ。さっきの一方的な、狩りを。一步、一步と化物は足を動かし、確実にこちらに近づいてくる。まだお腹が満たされていないようだった。あんな、人丸々食べておきながら。それでもモノ足りていないようだった。

僕はその光景を見て、必死に自分を奮い立たせる。

動け……！

それでも足が動くことはない。ただ震えて返答を返すのみである。その間も化物は容赦なく近づいてくる。さっきまであった距離の今はもう半分もなかった。あと、少しだ。それで化物はもう。

動け、動けっ……！！

足を引っぱたく。反応しない。

ああ、そうか……。

ここまできると僕はもう諦めた。

僕はどうしようもなく惨めにここで死ぬんだ。でも何故それを悲

しむ必要がある？　ここで逃げようとする意味がある？　僕は元から死にたかったんじゃないかったのか？　自ら死を望んでいたじゃないのか？

だったらここで逃げようとする必要は、ない。むしろこれは僕の希望通りじゃないか。自分で死ぬわけでもなく、他人がそれをやってくれるんだ。それは嬉しいことじゃないか。そう、喜ばしいことなんだ……。悲しいことなんかでは、ないんだ　……。

目の前で化物が覆い被さろうとしている。人なんてたしかに丸呑みできそうなくらいの大きな口を開いて迫ろうとしている。僕はもう、諦めて、死なんてどうでもよくなって、まるで他人事のようにその光景を眺めていた。

そうだ、これで僕はもう　……。

ズタンッ

「……？」

ここで全くといって良いほど不づり合いな、銃弾の音が耳に入ってきた。それもこの近く。この周辺。……いや、これはむしろここ……？

化物が動きをピタリと止めた。顔は毛むくじやらに覆われていてよくは見えない。でもきつと顔の中の瞳は、今起こったことを不思議に思っただけで瞬かしているだろう……。だがそれはほんの一瞬のことだ。今度化物はありえない格好のまま、ボタンとずれながら下へと倒れた。もう動かない。動けない。生体反応もゼロ。

つまり化物は、死んだのだ。僕を襲う少し手前で。僕は咄嗟に顔を上に上げて、その拳銃の主、並びに僕の命の恩人であろう人の姿を探した。

「あ……」

そしてその人たちは立っていた。工場の廃棄物が山積みになっている冷蔵庫やらガスコンロなどのガラクタたちの上にこちらを見下ろすようにして立っていた。光の逆光でよく姿は見えない。

でもシルエツトからするに、一人は男、もう一人は女だった。

「はっ、無様な格好だな」

そう鼻で笑うように言った拳銃を持った方の男がすたつと僕の居る地面に着地する。それに続き女の方が、

「ちよつと理人、失礼よ」

と窘めながらこちらはひょいっと可憐に下に降りる。

その反動でか女の方のスカートがぶわつと浮かんだが、こちらからは少し遠くて見えなかったし、それに今はそんな場合でもない。ここは自粛しておくことにしよう。

それで、だ。おそらく男の方が助けてくれたようだ。同じくらいの歳に見えなくもないのだが……。漆黒の黒髪に、冷たい射貫くような鋭い瞳、気の強そうな眉、整った顔立ち、あと制服っぽい服装。見た感じ、僕が悲しくなるくらいにかっこいい奴だった……。あともう一人の方は、この少女の方は説明するまでもない。

こちらは一回この世界で会ったことのある少女、藍梨だった。一回なにやら戦線に入らないかと勧誘をされたが断った。そしてその後初の出会いがこれだった。何だろう、これは運命なのか。しかし

こんな無様な姿で見られるとは……、なんとも悲しい限りではあるが。

茫然と座っている僕のところに一つは心配そうに、もう一つはめんどくさそうな足取りで近づいてくる。そして近づいた藍梨は僕の前に屈んだ。顔の高さを合わせる。

「あなた、大丈夫……？」

心配そうな瞳で尋ねる。

「ああ……」

しかし僕は生返事しか返すことができなかった。その様子を見ていた男の方が饒舌に口を挟む。

「ふん、腑抜けな奴だな」

「理人っ！　そういうことは言つては駄目よ。いい？」

そこを藍梨が牽制し、男を睨む。すると男の方は分が悪そうにふん、と鼻を鳴らしそっぽを向いた。この二人の立ち位置はどうやら藍梨の方が上らしい。

「無理もないわ……。人が死んだのよ……。それも目の前で。理人だつてその辛さは嫌と言うほど分かるはずよ」

「……そうだな」

藍梨と男の会話が目の前で繰り広げられている。しかし僕はさっき藍梨の【死】という言葉が頭にこびり付いて離れなくなっていた。【死】という言葉から自然とさっきあつた藤本さんの死を思い出す。そしてそれは頭から離れなくて、何回も頭の中を、藤本さんの死の

様子をリピートさせていた。そこだけが何回も何回も再生された。

そのたびに僕は、僕は……。

……………。

言葉もなかった。

それから後に何があったのかは意識がくらくらしていた所為で分からない。多分藍梨が僕に気を遣ったのか、はたまた危険だろうか、とを考えてくれたからなのだろうか、「あたしたちのアジトに案内するわ」と僕を男とともに連れ出した。

そして今、僕は二人とアジトに行くということでは歩いているところである。あたしたち、と括ることから分かるように、この男は藍梨と同じ戦線のメンバーであり、同じアジトで生活する仲なのだろうだ。藍梨は僕の為にいろいろ話しを笑顔で振ってくれた。

でも僕は放心状態にあり、まともに返答することなどできなかった。すべてが上の空だった。瞼を閉じてても開いても藤本が化物に喰われるところが目に映る。さらに、藤本の笑顔が浮かんでは消え、浮かんでは消え、の繰り返し。

だから近くで藍梨と男が、

「まさかここに残っていたとは思わなかったわ……。全部倒したと思っただのに……」

「藍梨がそんなに気に病む必要はないだろう」

「でもそれで人が一人、死んだのよ……？」

「……………」

そんな会話をしていることになど、気づくはずもなかった。もう僕は、自分で精一杯だった。

最初は廃墟ではば瓦礫と化していた工場、次に人がいないためか少し荒れた田んぼや畑の数々、そしてまた物が散乱し殺伐とした雰

困気の漂う商店街、最後に人のいる気配を感じさせないうつすら暗闇に包まれた住宅街と横の風景は変わりながら歩いてきた。

その頃には真上にあつた太陽は、地平線に少し隠れていた。夕方になるまで歩いていたようである。しかし疲れなどは感じなかった。数時間歩いた先の、住宅街のさらに暗い感じのある場所まで移動してきて、突如藍梨が歩を止めた。先頭を歩いていた藍梨は僕の方に振り返り、あるところを指さす。

「ここが、あたしたちのアジトよ」

僕は言われるがままに顔をそちらに向ける。昔は華やかだったのだろうが銀メッキが剥がれ落ちた鉄製の門、斜めにずれ文字は風や雨にさらされ薄汚れてもう読むこともできない表札、壁には所々黒炭が垣間見える白い家を覆う壁、穴が開いたりしてボロボロでギリギリ雨を凌ぐことができるかと思われる黒い屋根、そんなアパートが目の前に建っていた。何年も建ったままなのか全体的にボロい感じのアパート。そしてこれが藍梨たちのアジトだと言う。

ぼけーとしていた僕の顔を見ながら、藍梨は笑顔でこう言った。

「さあ、中に入りましょ！」

中は意外と奥行きがあつた。それに外とは違い、中は整備がされているのかきれいで、ごく普通のアパートになっている。ちなみにここはアパートだと言ったが、部屋がすべて隔離されているのではなく、それぞれ個々に部屋はあるもののひとつながりになっているようであり、いわばこれは一つの大きな家であつた。共同生活であると言っても差し支えはないだろう。そんなアジトの階段を上る。藍

梨の背中を追ってついていく。

二階が本部なのよ、と藍梨が言い率先して歩いている。本部ってのは、話し合ったり会合を開いたりするところなのかな。

ぼんやり考えながら、でもまだ酷い殺戮が頭から離れずにいる。どうしても考えてしまうのだ。僕が恐怖で声を失わず、藤本に声を掛けていたのなら藤本は死ななかったのではないか、と。今まで藤本は一人でも生きてきた強い人だった。だから僕が言葉にしていたなら、ほんとうは助かっていたのだろうか。しかもあの時、藤本さんは情緒不安定でいろんな思いが交錯していた。だから後ろをとられたとしても気づかなかった。僕がしっかりしていたら、藤本さんに声だけでも掛けることができたなら……！ 悔やんでも悔やみきれない。

だって藤本さんは『生きたかった』のだ。友だちの分も生きたかったのだ。そんな人の命を一瞬にして奪う化物は惨たらしい。酷く悔しい。僕がいけなかったんだ。僕が……、僕が……………。

「…ねえ、ねえってば、着いたわ。ここよ」

僕の思考が深くまでいつていたから、しばらく藍梨の声にも気づかないでいた。

「あ、ああ……」

やっと現実を意識が戻され、視界も戻る。たどり着いた先はどこか部屋の前だった。前には黒い扉がある。普通の扉と外見はなんら変わらないはずなのに、妙に威圧感を感じる。その扉に体を向けた藍梨は、

「じゃあ入るわよ」

と言い、扉に手を掛ける。
ギィイと重たい音がして、扉が開く。

「ただいま。今帰ったわ」

「……。」

そして藍梨と男は中に入っていた。僕は無言で部屋の中を覗く。中は机とテレビ、パソコンと幾多もの資料で埋め尽くされた棚とあとは小物が置いてあるくらいの簡素なものだった。椅子も個々に座るらしい物と、三人掛けくらいならできそうなソファが配置してある。僕が考えていたのとは少し違った。もっとサイバーな感じかと思っていたが、どこにでもありそうな家のリビングの光景だった。

「二人ともおかえりっ」

その部屋の中に、藍梨と男以外にもう一人人がいた。さっきまで椅子に座っていて、二人の姿を見るなり立ち上がる。元気はつらつとした女の子の声で二人を出迎えている。

「待ってたんだよ〜〜」

そして帰ってきたばかりの藍梨に抱きつこうとする。が、

「ちょっと待ちなさい、奈央。今日は別の人が来てるのよ」

と藍梨に制されきよんとする。顔を動かし、だれが来たのかと確認しようとする。

「あ」

そこで扉の手前にいる僕を見つけた。対する僕は見つけられた。

その子は僕を見つけた途端、目を輝かせ、

「お　　！　新しい人なんだよっ！」

と声を上げる。この子テンション高いな……。

やや童顔で大きめな瞳をくりくりさせている。身長は低め。栗色の短い髪を下に二つで結んでおり、髪は肩くらいの長さ。頭部にはアホ毛が元気に立っていて、その子の元気いっぱいな感じをこれでもかと表現している。服装は他の二人とは違い私服だった。上は帽子付パーカー、下は黒いスカート。その子は一言でいうなら天真爛漫、なのだろう。この子も僕たちと同じ年くらいに見えた。

入るのを躊躇い扉で立ち尽くしている僕に、

「あなたも入りなさいよ」

遠慮はいらないというように藍梨が声を掛ける。

「そうだよっ、入って入って！」

それに続きその子も声を出す。

僕はじゃあと遠慮はなくさせてもらい、入ることにした。入るとこの部屋の天井が思っていたより高いことを知る。奥行きがあつてなかなかにして広い。あれ、そういえば男の奴は？　声を上げていなくて気づかなかった。部屋を見渡すと、大きめなソファアーの上に足を組んで偉そうに座っている奴がいた。……この人が……。出会ったときから思ったが、偉そうな態度だよな……。まあ助けて貰った身だからそんなことは口にできないけど……。

のこのこと中に入る。その俺に藍梨が、

「あ、やっぱりちょっと待って」

「え？」

手をこちらに向け、止まれのポーズをとる。言われた通り僕は急停止をする。さっき入ってこいとか言っただのに今度は待つて……？
どういうこと？ 頭を疑問符で埋め尽くす。でもそれだけで僕以外の人は何かを察したらしい。

「ああ、あれするんだねっ！」
と嬉しそうに言う人もあれば、

「……………」
苦虫を噛んだような嫌な顔をする人もいる。

まあ言わなくてもどれが誰かは分かるだろう。
でも一体これから何をすると言うのだ？ 訳の分からぬまま、だが藍梨たちは着実に準備をしている。二つ結び少女が藍梨に耳打ちをし、藍梨はそれにコクコク頷く。男はもう、会話に入ろうとすらしなかった。みんなでというか二人で計画を立てている。

「手をここで上げて……………」

しかし二つ結び少女。声が聞こえてます、聞こえてますよ。小声で言ってるつもりでもこっちに洩れてます。だがそんなことはお構いなしで話している。……ううむ、これはどうしたものか……。そして話し合いが終わったのか二人は今度はこちらに体を向ける。で、同じくらいのタイミングで腕をこちらに向けバツと広げる。二人とも顔には笑顔を浮かべ、そして言った。

「「わたしたちの戦線へ、ようこそ！」」

今日は激動の一日だった。

あまりに残酷で辛すぎる藤本さんの死。

そして、新しい仲間との出会い。

僕のこの世界での生活は、まだまだ始まったばかりだった。

第十話 全員しゅーっ（後書き）

これで序章は終わりです。

読んでいただき、ありがとうございましたm（ ）m

ついでに感想や評価していただけるととても嬉しです。

次の第一章はこれより明るくなる予定です。

よろしければ、よろしくお願いします。

登場人物紹介（前書き）

多分これを見たら序章を飛ばし、一章から読むことも可能、
はずです…。

登場人物紹介

【登場人物紹介】

* 宮野 惟恩 （みやの いおん）

一応この作品の主人公。年齢は今年で16歳。

ある日突然何者かに刺され、『楽園』へと移転してきた。

性格は基本冷めている。何事にもやる気が湧かなくて、生きることもはやめんどくさいと考えてしまうようになった。しかしこの世界で初めて仲良くなった藤本の死を目の前で見たことにより、死への恐怖を感じ始める。化物から自分の命を救ってくれた恩人の藍梨に連れられ、戦線へと入ることとなった。

この戦線の中ではおおよそツッコミ役。一応物事を見極める至極まともな感覚を持っている。

* 上山 藍梨 （かみやま あいり）

主人公と同一歳くらいの子。この戦線のリーダー。

濃い赤色の髪を腰まで伸ばし、髪端に黒いリボンをつけている。帰宅途中に黒ずくめの男に襲われたのか服装は夏制服のまま。オシヤレなのか制服は自分流にアレンジしている。

性格はサバサバしていて、やや強気。しかし戦線メンバーの指揮をきちんと執ることができ、戦うこともできる有能な人材。

* 黒稀 理人（くろき りひと）

主人公と同年の男の子。拳銃、マシンガンのやり手。

漆黒の黒髪、精悍な顔立ち、キリとした眉とクールな表情で、世の中ではいわゆるカッコいいといわれる部類に入る。こちらも藍梨と同じ高校の夏制服姿。

性格は俺様であり、人を見下すような表情をすることがある。だがごくたまに優しい一面を見せることも…？ 大企業の社長の息子ということもあり、世間から考えが少々ずれている。

* 七瀬 奈央（ななせ なお）

主人公達より一歳年下の女の子。

明るい栗色の短い髪を下に小さく二つ結びをしている。上にはパーカー、下は黒いスカートと普通の外出着の私服。身長は低めで目はくりくりしていて外見が少々ロリっぽい。

性格は何事にもまっすぐで明るく元気。天真爛漫。

登場人物紹介（後書き）

これから話が進むにつれ、人物が増えたり変更点が出たりするかもしれません、あらかじめご了承くださいませ。

第十一話 始まりの朝

「……………ん」

何か聞こえる。

それは誰か、僕の名を呼ぶ声。

目の前で笑っているのだろうか、怒っているのだろうか、それとも、泣いているのだろうか。

分からない。

僕の周りは深い深い暗闇に包まれていて。

声のする方へと手を伸ばす。伸ばすことの出来る最大を使って手を向ける。

でも、手は何もない宙を虚しく掻くだけだった。近くにいるはずなのに遠い。ああ、なんて遠いんだ。すぐそこのはずなのに、どうして手が届かないんだ。

どうして。

どうして君は遠くに行ってしまうんだ。

「……………」

だんだんと声が遠ざかる。

待つて、待つてくれ。

いけないで、いつてはだめだ。

僕は届かないと知りながら、それでも懸命に声の方へと手を伸ばし

ドカァ ンッ

「!？」

部屋の中でまるで大砲でもぶっぱなしたかのような爆音が響いた。僕は音に驚き、あわててベッドから跳ね起きる。

なんだなんだ……？

何が起こつてるんだ……？

僕はまだ目覚めたばかりでぼんやりしている脳を懸命に動かす。そしてまずは、状況を確認することにした。

「……………」

が、しかし周りは灰色の煙で覆われていて視界が果てしなく悪かった。それはそうだ。大砲でもぶっぱなせば煙だってこれくらい立つだろう。

というかなんだこれは。

朝ベッドで気持ちよく寝ていたところで自分の部屋に大砲をぶっぱなされる？

…………… どういう状況だ、いったい。

…どんな朝だ。

「いおん惟恩　！　起きた　　！？」

僕がどうすることもできず茫然と立ち尽くしているところに、女の子の叫び声にも似た声が届いた。凜とした強い口調の女の子の声だ。

…気のせいか、いや気のせいなどではなく僕のこないだ知り合ったある女の子の声のように思われる。

僕がおそろおそろその声がした部屋の扉の方向に顔を向けると、

「惟恩、起こすのに手をかけさせないでよね」

と若干ムツとした顔で、左手に嫌に朝日の光に反射して一筋光を放つ黒い大砲を抱えた、藍梨が仁王立ちをして立っていた。ちなみに大砲の大きさは例えるなら米俵くらいで、ぱつと見片手で持つのも無理なくらいの大きさだ。

藍梨、君はどんな人間だ……。

というかこの世界では常識が通用しないのだろうか。

僕が何も言わずに立ち尽くしているのを見て藍梨は少し眉を上げる。

「あら、起きてないのかしら……？」

そしてまた肩に大砲を構え直す。しかも僕に向けて、だ。

「いや、起きてます、起きてますからやめてくれますか、藍梨さん

……」

返答する僕の言葉は怯えて丁寧な口調になってしまった。
いやー…、もう大砲は勘弁だよ。

僕のかしこまった態度で気分を直したのか藍梨は、「それによるしい！」と大砲を降ろしてくれた。

……藍梨のご機嫌取りか何かか、僕は。

「さあ、朝ご飯を食べるわよ！」

そう嬉々として歩き出す藍梨に、渋々と僕もついていく。

僕の静かな日々はどこへ行ってしまったのだろうか……。

小さくため息を一つつき、朝食を取るリビングに向かう藍梨の背中を追うのであった。

三階から一階へと続く階段を下り、リビングに行く過程で僕は考える。
それはこの世界について、そして何故僕はここにやってきたのかという事をだ。

この『楽園』と呼ばれる歪んだ世界にやってきたのは、ある学校の帰り道、怪しげな黒づくめの男に刺されここへと精神を『転移』させられたからだ。ここは人がほとんどおらず、化物という僕らを喰らう存在に毎日怯えながら生活をする。

どうしようか僕が途方に暮れていたときに出会ったのが、あの藤本さんであった。おじさんの年齢ながらクールな面持ちの若干精神に幼さの残る藤本さんに、この世を否定し死にたがっていた僕をこの世は悪いことばかりじゃないと励まそうとしてくれた。これから二人で旅の友をするはずだった。

しかし、藤本さんは化物に喰われ、身体の一部をも残すことなく死に、目の前でその存在を消した。勿論そのことを忘れることなどはない。一緒に居たのはたった1日のことであつたが、藤本さんは僕の戦友であり仲間だつたのだ。今でも子どもっぽいにかつと笑う顔を思い出すと、切なくなる。

藤本さんが死んだ後、僕を間一髪の所で救つてくれたのは同い年くらいの少女である藍梨と理人だつた。死ぬことを希望していたはずなのに、いざ場面に出くわすと死ぬことを躊躇っていた無様な僕を助け、藍梨は僕をそのまま自分のこの世界で生き残るために戦う戦線へと招待してくれた。

そしてその戦線生活初日が今日なのだが……
なかなかエキセントリックな朝から僕の1日は幕を開けてしまつたようである。

いくら僕が起きないからって大砲を使うというのもあんまりだろう。

ん……？

そっぴや僕は今朝、なにか夢を見ていた気がする。

とても哀しくて、苦しくて、辛い夢。

でもどういった話しだつたのかは全然覚えていない。誰がいたのか、どこにいたのか、なにをする話だつたのか、まったくもって記

憶にない。あるのはその時の夢での僕の心情だけだ。

……何だっただんたろうか。

気になって首を傾げてみるが、特にどうすることもできなかった。
自分の頬に触れてみる。

するとなぜだか、流れてもいない涙がここを伝っていたような気がした。

ガチャ
藍梨が廃墟に不釣り合いな大きな扉を開き、リビングに入った。

第一步を踏み出すと同時に、香ばしい匂いが鼻を刺激する。

食卓を見ると、パン、スープ、ハムのついた目玉焼きにサラダと洋食がずらりと並んでいるのが目に入った。

「もう、惟恩さん遅くーい！」

椅子には二つ結びの髪が今日もちよこんとかわいい七瀬奈央が座っていて、片手にフォークを持って、ぷーっと頬を膨らませてこちらを見ていた。

ただでさえ身長が小さいし童顔なのに、その上こんな行為をしているとほんとうに小さな子どものようだ。うん、とても一歳年下だとは思えない。

「奈央ごめんねー。惟恩のこのバカが全然起きなくて大変だったのよ」

藍梨が僕に変わって謝る。でも僕に対して言い方があんまりだったが。

ずんずん藍梨が進んで自分の席に着くので、僕もそれに倣い、空いている席に腰掛ける。

「……………」

僕の右隣は僕を助けた命の恩人でもある黒稀理人くろきりひとが威圧感を放ち、足を組んで座っていた。漆黒の黒髪、整った顔立ち、そして纏っている雰囲気はクールそのもの。

しかし今は切れ長の瞳はいつもより細く、怒のオーラを見て取れた。

うわぁ…、朝食遅れたこと怒ってるー…。

あえて何も言っていないところが、怖い……。 怖いです…。

だがそんな様子に気づいている様子もなく、藍梨は事なげにパンツと手を合わせた。

「いただきます」

それに合わせてみなも口々にいただきますの言葉を口にする。

そんな風に、僕の始まりの朝は始まったのだ。

第十二話 昨日の出来事

昨日　　すなわち僕が初めて戦線に加入した日にあった出来事はこんなことだった。

「それじゃ、初めは自己紹介をしましょうか！」

まず口火を切ったのは藍梨だった。

みなが席に着き、やっと落ち着きを取り戻しつつある最中、ガタツと椅子から立ち上がり、机に両手を置いてみなを見渡しながら、藍梨が口を開いた。

「あたしの名前は上山藍梨^{かみやま あいり}よ。　ちなみにこの戦線のリーダーでもあるわ。あたしは高校の登校途中に黒ずくめの男に襲われてここにきたの。ここでの生活は……、一ヶ月弱ってどこかしら。一応武器で戦うのには慣れてるわ。よろしくね」

そして言いたいことは言い終わったと言わんばかりに藍梨は話終わってすぐ、腰を下ろす。

その様子を先程まで沈黙を貫き、目を閉じていた理人という漆黒の髪の少年は目を開き、唇の端をひいて眼差しを藍梨に向けた。

「お前の戦いは、慣れてるごときのレベルじゃないだろう」
「……………」

もっとお前は強いだろう？　と、理人という男の目がそう言っていた。

皮肉にもとれるような発言を、藍梨は何事もないかのように無言で聞き流す。

でも気のせいか、微かに手が震えているように見えた。

若干の重たい空気が部屋を包み込む。

それが居心地が悪いと思ったのだろうか、奈央と呼ばれた女の子が「はいはいはい！」と元気よく挙手をした。立ち上がって藍梨に体を向ける。

「んじゃあ今度は私が自己紹介でいい!？」

「え、ええ……」

あまりの元気良さについていけず、藍梨は押され気味に返答をした。

了承を得たと認識した奈央という少女は、片手を上に上げ、もう一方の手で小さく拳を胸の所に作って、さっそく話し始める。

「私の名前は七瀬奈央だよ！ みんなのアイドル奈央ちゃんですよ！ よろしくねー!」

「いつあんたはアイドルになったのよ……」

ハイテンションフル稼働。

藍梨がため息混じりで奈央という少女につっこむ。

元気すぎて正直ついていけなかった、が、しかしその子のおかげで周りの空気が弛緩した。やわらいで、明るい空気になった。

まだまだ奈央という少女の話は続く。

「好きな食べ物はリンゴで、特技は美術、好きな動物はハムスターだよ！好きなお菓子はせんべいで、嫌いな食べ物はキムチかな！辛いものは苦手です！そいでね、そういでね」
「長い」

意気揚々と話す奈央という少女の言葉を、苛ついた表情の理人という男の子がぶった切る。

……いやまあ確かに長いけどさ。詳細が細かすぎるけどさ。

「むー、なんで途中で遮るのさ」

ぷくーと頬を膨らませて奈央という子が理人という男の子を睨む。でも童顔でおまけに身長も低いのでその行動はさながら小さい子のようで、あまり恐くはなくむしろ和やかな感じであったが。

しばらく機嫌を損ねていた奈央という少女はしかし途中、あつ、と何かひらめいたかのように手をぽんと叩いた。そして笑顔になる。

「じゃあさ、理人さんのことについて語っちゃおうか！なんだかこのままだと第一印象が悪いしね。それじゃ理人さん可哀想だし、つてことでわたしが語ってあげましょう」

えっへんと胸を張り、奈央という少女は語り出す。

「あのね理人さんって今はクールな感じでしょ？俺に触るな、触ると痛いぞみたいな雰囲気が出ているでしょ？」

「おい、やめろ」

その様子を顔をしかめて理人という少年は止めにかかる。だが今回は奈央という子は止まらなかった。

「でもねでもね、ほんとにすごく繊細な心を持つてて」

グサッ

指を一本立て、いい気になりながら話している奈央という子のすぐ真横の壁にナイフが刺さる。ほんとうに奈央という少女とすれすれでまさに目と鼻の先くらいの位置であつた。さっきの一瞬の間にナイフが投てきをされていた。

……だ、誰がこんなことを……？

啞然として飛んできた方向に顔をぎぎぎと動かすとそこには、

「やめろと言ったのが聞こえなかったのか？」

今まさに発射したのだろう片手が残つたままで、理人という少年が何とも言わせぬ黒いオーラを纏つて座っていた。目からは鋭い閃光を放ちながら低いドスのきいた声で、だ。

「……………」。

………すいませんでした、自分ほんと調子ofてました。だから許してください……………」

あまりの怖さに恐れを成したのか奈央という子は態度を一変させ、理人という少年に向かって真剣に土下座をしていた。

………これまたシニールな光景というかなんというか……………。

「いつまでこんな感じなのかしら……………」

右隣の藍梨がボソッと呟く。

え、いつもこんな調子なの……？

うん、なんとなく関係性が掴めた。

奈央という子は明るいがはっちゃけすぎで暴走することがあり、それに理人という男がキレる、と。

……こんな二人をいつもまとめる藍梨は大変だろうなあ……。
なんて戦線初日にリーダーに同情してしまう僕だった。

「次は理人ね」

藍梨が自己紹介を促す。

その言葉を聞き、理人という男は耳をぴくりと反応させる。

「……俺もか？」

「当たり前でしょ。みんなやってるんだから」

「……………」

しばらく沈黙の時間が続く。

何秒か後、やれやれと諦めたかのように、理人という男は口を開いた。

「俺は黒稀理人だ」

「……………」

「……………」

どうやらそれで自己紹介は終わりのようだった。
しかも足と腕を組むえらくふてぶてしい態度だからもつどうしようもない。

「あんたねえ……………」

さすがに藍梨もあきれてしまったようだ。

「自己紹介なんだからもつと話さないよ。これは名前紹介じゃないのよ?」

「……………」

「ほら、ちゃっちゃと話して」

「……………歳は十六、高校は藍梨と同じだった。これでいいか?」
「だからもつと話さないって」

そんな会話が目の前で繰り広げられている。

しかしそれよりも僕は引つかかることがあった。

黒稀理人だつて…?

黒稀つてあの日本を支える三大大企業のなかの一つである『黒稀』
……………?

気になったので黒稀理人の横目で見える。

漆黒の黒髪、鋭い切れ長の瞳、クールで整った顔立ち やは
り間違いない。

僕はこの人を見たことがある、知っている。

「もしかしてさ」

僕が話すと、討論していた藍梨とその男が二人して討論を止め、こちらを見た。

だから僕は黒稀理人を見据えて言う。

「黒稀理人って、あの黒稀財閥の息子なのか？」

僕の台詞を聞いた途端、黒稀理人は苦虫を潰したかのような表情になった。

「まあ、な……」

それっきり黒稀理人は何も言わなくなる。

そしてもうこの話題には触れられたくない、という風に腕を組み別の方向に視線を移した。

不思議に思っただけで藍梨と奈央という子の方を見る。

二人ともが苦々しい顔をして、曖昧に笑みを作っていた。

黒稀理人にとってこの話題は禁忌だったのか……？

……よく分からないが、もうこの話題には触れない方がいいだろう。それがよく分かっているのか藍梨が僕に話を振ってきた。

「ねえ、あなたも自己紹介をしなさいよ」

ほれほれと顎を動かし催促をする。

やはりこの流れだと僕に来るのは当たり前、か。

ここに入れてもらうという手前、自己紹介はしておかなければならないだろう。

僕も戦線メンバーを見渡しながら、口を開いた。

「名前は宮野^{みやの}惟恩^{いおん}、高校二年生。ある日学校帰宅途中に黒ずくめの奴に刺され、気がついたらここにいた」

ここまでなら普通の自己紹介となんら変わりはないだろう。だが僕は、一つ付け加えたい事がある。

冷え冷えとするコンクリートの壁、薄汚れた黄色の光を灯す蛍光灯、カーテンのない枠でガラスの装飾された窓、古傷のある金属の机。それら命とは無縁そうなそんな存在を目に映してから、僕は淡々とこう言った。

「僕は、生きることが好きじゃない」

「……！」

驚き目を見張ったのは藍梨と黒稀理人だった。

向こうを向いていた黒稀理人は顔を上げ、僕を啞然として見ていた。が、その後つまらなそうにふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

そんな中僕が違和感を感じたのは七瀬奈央だった。七瀬は僕の発言を聞き顔を強張らせ、自分の唇を噛んだ。

どうしたのだろうか、そう思ったが僕の思考は藍理の声によって遮られる。

「…どうして？ 生きることが嫌いなのか？」

「うん。嫌いってほどではないけど、苦痛には思っくらは」

「何で…？」

「……………」

しかし僕はその問いには答えなかった。否、答えることが出来なかった。

僕にだって語りたいこととそうでないことくらいは、ある。

それに記憶に若干の欠如があつて、まともに話せそうにもなかった。

藍理は僕との問答をしてから、聞きたいことがあるように口を開こうとしていたが、しかし言葉を途中で飲み込んでしまふ。恐怖の色が窺える。

…自分じゃ自分のことは分からないが、もしかしたら僕は今凄いい形相をしているのかもしれない。

次に藍理の代わりに口を開いたのは黒稀理人だった。

「なら外に出ればいいだろう。死にたいんなら外にちょうど都合良く化物がいるぞ」

そして至極当然のことを言われた。

それは僕だって理解している。でも……。

「駄目よ……！」

「！？」

言い淀んでいた僕ではなく、叫び声のような言葉を発したのは意外にも藍理だった。僕の方が目を丸くさせる。

「そんなのは駄目よ！ もう人が死ぬのなんて御免なの！ 助けることの出来る命がなくなってしまうなんて駄目なの……！」

酷く悲痛な声だった。

体が引き裂かれるようなそんな叫びだった。

藍理は腕で自分の頭を覆う。嫌、嫌と頭を横に振った。

何かのトラウマのスイッチが入ったのか。

……分らない、が、藍理に庇って貰いながら何も言わないなんていけない。

僕は弁解なのか、はたまた言い訳なのか、それとも本心なのか、自分自身分からず心がゴチャゴチャになりながら言葉をはき出す。

「今日、僕の仲間の藤本さんが死んでしまいました」

僕の言葉を聞き、戦線メンバーの誰かが息を呑んだのが分かった。

「それまで死にたいだとか、生きるのが辛いとか散々言っておきながら勝手ですよ。でも目の前で見てしまったんです。人の【死】ってやつを、目撃してしまったんです。正直言っただけ怖かった。死ぬことは恐ろしいことなんだな、と体を震わせた。だから死ぬのは怖い、でも生きていたくないっていう矛盾です。

僕は自分勝手な人間です。……どうすればいいのか、どうするのが一番いいのか全然分からないんです」

「……………」

みなが無言で聞いている。

呆れているのか、馬鹿らしいと思っているのか。
僕は返ってくる反応が少し怖くて、目を閉じた。

「あんたバカね」

顔は見えない。

藍理が真っ先に口を開いた。

やっぱり、こんな考えなんていけないのだろう……。

僕は次に批判されるだろうと身構えた。

しかし、

返ってきたのは予想外の言葉だった。

「とりあえず、生きてみたらいいのよ。別に死にたくても良いの。
人間なんて自分勝手な生き物よ。そんな考えがあつたって、いいじやない。とりあえず結論が出るまでこの戦線にいたらいいのよ」

始めは耳を疑い、心底驚いた。

そんな考えがあつていいのか、と。

自由奔放で適当なそんな選択肢があつてもいいのか、と。

「だからね、ちょっとあたし達と生きてみない？」

目の前で藍理が満面の笑みを浮かべる。

結論を先延ばしにただけにすぎないし、何よりそんな考えの僕
なんかが一緒にいてもいい訳、ない……。

僕は恐る恐る他の戦線メンバーの顔を窺った。
すると、

「うん！ 惟恩さん、一緒に生きようぜ！」

と七瀬奈央がニヤリと片手ピースをしていて、

「ふん、貴様はどれだけ自分が偉いと思っているんだ。俺は知らん。
勝手に生きればいいだろう」

と黒稀理人が何故かそっぽを向き、声を上擦らせて言う。
それを見ていた藍理がはーんと口元に笑みを浮かべて、

「理人、あんた照れなくてもいいのよ」
「て、照れてなどいない……！」

なんていう会話をしている。

僕はその言葉を聞くだけで、どうしようもなく心が温かくなるように感じた。

受けいれてくれている……。

こんな僕なんかを、存在を認めてくれている……。
かつこ悪いから泣かなかったが、ほんとに涙が出そうなくらいだった。

この人達はすごい。僕とは違う、別の何かをたくさん持っている。
そしてそれは、他の人たちを明るく照らすことのできる力がある。
この人たちと生活できるということは、それはとても幸福なこと
であると感じた。

だから僕は……

「よろしくお願いします」

そう自分から、頭を下げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9231t/>

名もなき戦線の物語

2011年10月10日15時47分発行